

---

# シークレットナイトライド 再編版

西村真琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シークレットナイトライド 再編版

### 【Nコード】

N7690Y

### 【作者名】

西村真琴

### 【あらすじ】

三流評価装置メーカーに勤める神崎龍人は半導体の解析技術者だ。実は彼は大学を首席で卒業した天才である。神崎は自分から三流会社を希望し入社したのだ。学士の道を選ばず企業人としての成功を目指す神崎は日々研究評価に明け暮れる毎日だった。

## 第一章 シークレットナイトライド（前書き）

処女作の短編版シークレットナイトライドを連載小説版に再編します。

短編版のシークレットナイトライドは、しばらくの間そのままにしますが、時を見て消しますのでよろしくお願い致します。

## 第一章 シークレットナイトライド

その電話がかかってきたのは夕方の17時過ぎだった。

神崎は顕微鏡を見ながらクリーンウエアのサイドポケットからPHSを取り出した。

「もしもし神崎です、ただ今、半導体ウエハの解析中で手が離せないんですが」

半導体ウエハとはICチップの集合体で普通はこのウエハを切り刻んでひとつのチップを作る。

「解析技術課の田町ですが中村技術課長からお電話が入ってますので転送します」

「課長？」

神崎は顕微鏡から目を離した。

何だろう？　もしかして顧客に提出した解析レポートの件か？　忙しくて時間が無かったから試作中の評価装置で実験したやつだ。

「これはまずいな」

神崎は少し不安になった、心あたりがあったからだ。

案の定その電話の内容は顧客に提出した解析レポートの件だった。ただし、クレームでは無い様だ。

「神崎君、第一技術会議室に今すぐきてくれないか」

「はい、何でしょうか」

「君に来客だ、新和開発社に提出した君の解析レポートの件でちょっとね」

「あつ、はい、わかりました、すぐにそちらへ向かいます」

神崎はあわてて評価室から飛び出すとクリーンウエアを脱いでクリーンルームから会議室へと急いだ。会議室に向かう途中で技術営業課の中川とすれ違った。

「そうだ、例の評価物件は中川の依頼だったな、何でも特別の依頼だとか。」

中川は神崎の高校の後輩だった、たまたま同じ会社に就職したが一流大学出身の中川はエリートコースだ。しかし、今だに神崎のことを先輩と呼んでいる。

「おい中川、例の黒いウエハの評価の件で来客なんだが、おまえ何か聞いているか？」

「えっ、聞いてませんよ先輩、あれ俺の内緒の依頼なんですが」

「内緒の依頼っておまえ・・・」

「実は設備の大口注文を取るのに別件で評価サービス引き受けちゃったんですよ」

「何だつて」

「中村技術課長には内緒だったんですけどバレちゃいましたか？」

「バレちゃいましたよ、たぶん」

中川は両手を合わせると片目をつむりながら軽く会釈した。

営業は顧客の受注を取るための手段としてよくこの手を使う、評

価サービス無料を売り文句にして評価設備の販売実績を上げるわけだ。会社としてはトータルで利益を上げていけばよい訳で無償サービスもOKと言う訳だが、結局そのつけは解析技術課にいつも回ってくる。おかげ様で我が解析技術課のメンバーも評価装置も年中フル稼働だ。

神崎が技術会議室のドアを軽くノックして開くとドア越しに紺色のスーツを着た男の姿が見えた。会議机の上に目をやるとその男は神崎の評価レポートを開いて中村課長と話をしていた。

「神崎です、遅くなりました」

神崎は紺色のスーツの男に軽く会釈すると課長の中村に視線を合わせた。

中村は少し笑いを含んだ表情でこちらを見た。

「神崎君、こちらはフェニックス社の獵田さんだ」

「フェニックスの獵田です、よろしくお願いします」

獵田は椅子から立ち上ると名刺を神崎に手渡した。

名刺を見るとフェニックス社営業部獵田博久と書かれてあった。

肩書きは営業部長だ。

神崎も手帳から名刺を取り出して獵田に渡した。

「解析技術課の神崎です、よろしくお願いします」

「神崎様、御社に依頼致しましたサンプル評価の件ですが」

「はい」

「依頼元の新和開発社様で大変好評でして御社の評価装置をぜひ購

入りたいと言われております」

「えっ？ あのレポートがですか？」

神崎は戸惑ってしまった。

実はそのレポートは少々手抜きしたレポートだったからだ、サービスの場合は、あまり細かい評価までしないのが常だった。しかも商品として完成していない実験装置を使用した評価だったのでデータの信頼性は保障出来なかった。

「と言うことなんだ神崎君」

「はあ？」

「君のおかげで当社の新商品の初契約がとれたんだよ、しかも一気に3台の契約だ」

「えっ？」

「よくやってくれたね」

「はあ……」

「なんだ、神崎君もつと喜びたまえ、たった一ヶ月で約3億の売り上げだからな」

「はい」

「今年の君の人事評価はAAAだぞ」

中村課長は満面の笑みを浮かべていた。

俺がAAAなら課長の評価はスペシャルAAAで今年は部長昇格でしょう？

神崎は思わず心の中で問いかけてしまった。

「ところで神崎様、評価レポートのデータについてなんですが」

「はい」

「検出された金属の詳細データはお持ちでしょうか？」

「ええ、ありますが」

「依頼元の新和開発社様の方から詳細データを要望されているものですから」

フェニックス社は中間業者で顧客と設備メーカーの間に入って商談をまとめる商社だ。俺たちが徹夜で評価したデータも商社はそれを右から左に渡すだけで利益があがる。

俺も商社に転職しようかな？

神崎はまた心の中で問いかけてしまった。

その金属の詳細データを神崎は手元に持っていた。

「ここにありますが、えーとですね、確か検出された金属は銅、アルミ、チタンですね」

神崎は解析資料を机の上で獵田に広げて見せた。

「あつ、それと、インジウムが入ってますね」

獵田の表情が一瞬だけ変わったが神崎は資料に夢中でそのことに気が付かなかつた。

詳細データのコピーを獵田に手渡すと獵田はすぐに帰り支度を始めた。

「あつ、獵田様、もうお帰りですか？ よければ帰りに食事でも如



何でしょう?」

「いえ結構です、本日はありがとうございました、本契約の際はよろしくお願い致します」

「こちらこそよろしく申し上げます!」

中村課長は獵田を接待に誘ったが獵田は軽くかわしてさっさと帰っていった。

打合せの後、廊下を通り技術営業部の前を通り過ぎると窓から中川の姿が見えた。

中川も運のいいやつだな、本来なら無断の評価依頼という事でお叱りをくらうところだが3億円の売買契約成立ともなれば逆に評価されるだろう。

神崎は窓越しに中川の顔をのぞきこんだ。

中川は電話をしていた。顧客の電話対応だろうか、しきりに頭を下げている。

「さて、残りの仕事を早く片付けてしまおうとするか」

神崎は両手を上げて伸びをしながらもう一度窓の方を見たが中川は相変わらず電話で頭を下げている。神崎は窓の方を見ながら部屋の出入り口付近まで通路を進んだ。通路に視線をもどそうとした時、部屋の奥から出てくる女子社員の姿が見えた。彼女は扉を開けて通路へと出てきた。

一瞬、彼女と目が合った。

気品のある顔立ちで、そのスタイルの美しさは事務服の上からでも確認できた。

神崎は少し見惚れてしまった。

彼女は少し会釈をすると神崎の前を通り過ぎていった。彼女が通り過ぎた時わずかに香水の香りがした。

「あんな綺麗な女子社員うちの会社にいたかな？」

神崎は後ろを振り向くと思わずつぶやいた。

「神崎さん、何してるんですか？」

後ろを振向くと、こんどは解析技術課の田町由香里がいた。

「神崎さん、今日お願いしたP社のサンプル評価終わりましたか？」

「いや、もうちょっとなんだ」

「あれの評価結果を早く知りたいんですよ〜お願いしあっス！」

田町は神崎と同じ課で全体の評価進行を管理している技術管理事務員だ。今年入社の新人社員で彼女も結構美人だが男兄弟の中で育つたらしく性格が男っぽい。管理職連中の前では丁寧語で話すが現場では普通に今時の言葉で話している。現場技術者の中では人気者だ。

「はいはい、お願いされあっス」

神崎は笑って冗談をかえした。

神崎はエアシャワーを通り抜けて評価室に入った。

評価室はクリーンルームの中にありダウンフロー式クリーンルームの環境は清浄度クラス10だ。半導体ウエハの製造が出来るレベルに保たれている。照明は全てイエローランプで一旦入室すれば今が昼なのか夜なのかさっぱりわからなくなって時間の感覚が狂う。

クラス10とはクリーンルームの空気清浄度を表す。

「さて、手っ取り早く片付けるとするか、今日はX線分析で完了の  
はずだったな」

神崎はP社の評価サンプルを保管庫から取り出した。

保管庫の中には顧客からの評価依頼サンプルがぎっしりと詰まっ  
ていて、例のブラックウエハのサンプルもそこに入っていた。

神崎が保管庫の扉を閉めようとした時、誰かの声がした。

「神崎さん、ちょっといいですか」

振向くと生産技術課の吉田がいた。

吉田は新規設備の組立調整担当だ。

「ああ、いいよ、何だい」

神崎は返事をした。

「試作中の評価装置なんですけど、ちょっと不具合がありました」

「えっ？」

「先日、神崎さんが評価で使用された時、実は電子走査線のピン트가ずれていたんですよ」

「えっ、そうなの？」

「なので、サンプルの計測ターゲットポイントがずれた可能性があります、申しわけありませんでした」

神崎は返事に困ってしまった。

例のブラックウエハの評価で使用したのだが、無理を承知で設備を借りた為、文句は言えなかった。

「いいよ、評価は終わっているし、それに顧客に評価データを提出してしまっただ」

「そうなんですか」

「ああ、気にしないでくれ」

神崎がそう言うと吉田はほっとした様子で作業場に戻った。

神崎は保管庫の扉を閉めかけたが気になってもう一度開けた。そして、例のブラックウエハサンプルを取り出した。

「再検査してみるか？」

サンプルを眺めながら神崎は考えていた。

このサンプルを受け取った時からどうも違和感があったのだ。普通、半導体ウエハはシリコンで作られているため銀色に光るのだがこのウエハは真っ黒だ。その理由はわかっていた。表面に炭素で皮膜が形成されているからなのだがこの炭素被膜にどんな効果がある

のか推測出来なかった。フェニックス社はこの炭素皮膜以外のウエ八周辺部だけを解析依頼していた。

この炭素皮膜の下には何があるのだろうか。

神崎は解析屋としてこの皮膜の下にある部分を解析してみたいと思った。しかし、サンプルの破断解析は許可されていなかった為、正確な分析は不可能だ。

神崎は吉田が作業している試作評価装置のエリアへ向かった。

「吉田君、さっきの話なんだけどさ、再検査する時間はあるかな？」

吉田は作業の手を止めて設備の横においてあった工程表を確認した。

「今から1時間位ならいいですよ、組立スケジュールは若干先行してますので大丈夫です」

吉田はそう答えると装置の設定条件を変更してくれた。

神崎はブラックウエ八を装置にセットすると計測スイッチを入れた。

装置はウエ八をチャンバー（反応器）内に移送して真空処理を開始した。測定器のモニターには分光波長の測定データが表示されている。

神崎は測定ターゲットを狙って電子ビームの位置調整を始めた。

「吉田君、ありがとう」

神崎は吉田に礼を言つと測定器のサーバーからデータを取り出した。

「ところで、吉田君、ピントのズレはどれ位だったのかな」

「0・005 μm位です」

「0・005 μmか、まあ、誤差の範囲内かな」

神崎は吉田に手をあげてOKの合図をした。

吉田は設備の計測モードを元の位置に合わせて再調整を始めた。

神崎は測定器のサーバーから取出したデータを分光解析専用サーバーに移して解析スタートボタンを押した。

モニターには”処理中”が表示がされた。

「さて、今のうちにP社のX線分析を片付けるか」

神崎は保管庫からP社のサンプルをもう一度取出すとX線分析を始めた。

「待てよ、この際ブラックウエハもX線分析してみるか・・・」

フェニックス社の解析依頼にX線分析の要望は無かったが神崎は炭素皮膜の下にある回路パターンを見たくなくなった。神崎はP社サンプルのX線評価を手短に片付けるとブラックウエハをX線分析装置

にセットした。

「まあ、契約違反だけどな」

神崎はひとりでつぶやきながらX線分析装置のスタートボタンを押した。

装置は軽いモーター音を響かせながらウエハーのスキヤニングを開始した。

「あれえ？」

神崎はモニターを見て拍子抜けした。

「うそでしょう？」

またひとりでつぶやきながらX線分析装置の観察倍率あげた。

「そんな？」

神崎は首を振った。

X線分析装置には何も映っていなかった。神崎は炭素皮膜の下に回路パターンがあるものと信じ込んでいたのだがそこには何もなかった。

「この炭素皮膜はただのお遊びなのか」

神崎はサンプルを片付け始めた。あてが外れたのですっかりしていた。

「さて、片付けて帰るか」

神崎は装置の電源を切るとサンプルを保管庫にさつさと片付けた。P社X線評価データを手短かに片付けると田町のPHSに電話をかけた。

「田町、神崎だけど、P社の解析が完了したからデータをそちらに転送するよ」

「あつ、神崎さんですか、ありがとうございあつス、助かりまつス、お疲れ様でつス」

「俺はもう上がるからね、よろしく!」

「了解つス!」

「はあ〜今時の若い子と話すと疲れるな・・・」

神崎はまたつぶやいた。

「神崎さん、分光特性データの処理が終わってますよ」

後ろから吉田の声がした。

そつだ、吉田の設備で測定した分光特性データを忘れていた。

神崎は吉田に手を上げるとOKサインを出した。

分光解析専用サーバーのモニターには検出された金属の波長が表示されていた。

「えーと、銅、アルミ、チタン、インジウム、あれ、もうひとつ何か検出されてるぞ。・・・ガドリニウム?」



ガドリニウムと言えば造影剤とか超電導材に使用される材料じゃなかったかな？ 確か．．．そうだ、超電導磁石だった様な気がするな。炭素皮膜にインジウムにガドリニウムか？

神崎は顎に手をやると考えこんだ。そしてはっと思いついた。

これはもしかしてカーボンナノチューブを利用した超伝導半導体じゃないのか？ だとすれば情報処理能力は最低でもシリコン半導体の1000倍以上はある。しかも超伝導でウエハ全体が1つの集積回路として動作するとなると．．．この1枚のウエハで現在の巨大なスーパーコンピュータを凌駕するのか？ もしそうだとすれば半導体の歴史を覆してしまう程のスーパーモンスターウエハだ。このウエハを何枚か並列動作させれば宇宙の構造解析だって出来るに違いない。

「すつげー、マジかよ、こんな代物をうちの会社に分析依頼してくるなんて？」

神崎は驚きながらモニターに表示されたデータを眺めた。

「よし、分析完了だ」

神崎は測定データを技術管理サーバーに転送した。

情報ランク：AAA（厳秘）

管理フォルダー名：シークレットナイトライド

管理データNo：N34600 - Black - Wf

ナイトライドとは窒化物を示す。

神崎は田町のPHSにもう一度電話をかけた。

「ププ．．．ププ．．．もしもし、はい、田町さんのPHSです」  
「あれっ、神崎ですが田町はもう帰りましたか？」  
「田町さんは5分前位に退社されました」

田町のPHSに出たのは別の事務員だった。

「技術データを事務所の技術管理サーバーに転送しましたので記録してもらえますか」

「あの、記録ってどうしたらよろしいですか？」

「えーと、田町の机の上に赤いファイルがあるんですけど、そこに作業記録表があります」

「ああ、ありました、これですね」

「そこに記録してもらえますか？」

「わかりました」

「名前の欄に神崎と書いて下さい、データー登録時間は．．．20時15分かな」

「はい」

「データーファイル名はN34600ハイフンBlackハイフンWfと記入して下さい」

「はい、記入しました」

「えーと、あともうひとつ、ファイル名の横に情報ランクと管理フォルダー名を記入して下さい」

「はい」

「情報ランクはAAA、管理フォルダー名はシークレットナイトライドです」

「情報ランクはAAA、管理フォルダー名はシークレットナイトライドですね、はい、神崎様OKです」

「ああ、ありがとう」

PHSから聞こえた事務員の声は上品で若々しい声だった。

「田町と偉い違いだな、女子社員はやっぱりこうでないかね、神崎様だからね」

あれ？ 解析技術課の技術管理係に田町以外の女子社員なんていたかな？ 田町のところも業務容量がパンク寸前だからアルバイトか派遣社員を雇ってもおかしくはないが・・・

「さて、帰るとするか」

神崎は帰り支度を始めた。

セキュリティカードをかざして会社の門を出ると21時過ぎだった。

神崎は腕時計を確認すると背広から携帯電話を取り出して連れの金城剛司に電話をかけた。

「もしもし、ああ、金城、今日21時から飲みに行く約束だったよな」

「ああ」

「すまん、ちょっと遅れたけど、これから行くから、先にやっててくれ」

「了解」

「それじゃ、いつもの店で」

携帯を切ると神崎は大急ぎで駅に向かった。

## 第一章 シークレットナイトライド（後書き）

初めて小説らしきものを書く超初心者です、よろしくお願い致します。

小説の書き方もわからずに投稿してから完結まで約5ヶ月もかかってしまいました、執筆中に何人かの方が読んでくれていたようですね、こんなド素人の小説を読んで頂きましてありがとうございます。

感謝致します。

追伸

画面の下に”小説家になろう 勝手にランキング”って言うボタンがある様です。

よかったら、ポチっと押してね。

## 第二章 侵入者

連れの金城剛司とは高校時代の同級生で腐れ縁だ。高校時代は柔道部でインターハイに何回も出場して連続優勝の記録も持っている。筋肉質で体育系だ。体育大学に進学し

て一時は工業高校の体育教師をしていたが何を思ったか今は教師を辞めて探偵をしている。

駅の改札の前を通り抜けて駅前商店街に出ると行きつけの居酒屋が見えた。

神崎は店の暖簾をくぐると金城を探した。

金城は店の一番奥のテーブルに座って店長と話していた。店長が冗談を言っている様で金城はゲラゲラ笑っていた。

「あつ、神ちゃんいらっしやい！」

店長がこちらを向いて手をあげた。金城は笑いが止まらないらしく涙を流して腹を抱えていた。

「おお、神崎、こっち、こっち」

金城は手招きをした。神崎が金城の横の席に座ると金城は自分でグラスをとって神崎にビールをついだ。

「何笑ってんだ、金城」

「ハハハ、神崎聞いてくれよ、店長が冗談ばかり言うからさ、笑

いが止まらなくて腹が痛くって」

「そう」

「店長が言うにはさ、昨日の新装開店で客が駅の改札まで並んだって言うんだ」

「えっ、すごいじゃないか」

「ハハハ、神崎よく考えて見るよ、駅前まで何メートルあるんだ、50メートルはあるぜ、うそだよ、うそ、こんなチンケな居酒屋の前から駅の開札まで並ぶわけないじゃないか」

いか」

「そうか」

「駅前までなら、まだ許せるけど、駅の改札だぜ、絶対在り得ないよ」

「ハハハ、なんだ、また、うそか」

神崎も可笑しくて笑った。

神崎と金城はこの店の常連客だった。日頃のストレスはこの店でよく発散させている。

2階建ての小さな店だが、安くて旨くて店長が面白いので結構流行っている。店長の冗談話で盛り上がった時、2階の座敷から誰かが降りて来た。

「あっ、神崎さん見つけ」

神崎が振り返ると後ろに田町が立っていた。

「あれえ、田町じゃないか、何してんだおまえ、先に帰ったじゃないのか？」

「へへえ、帰って無いっス、今日は課長がご機嫌で事務所のみんな集めて飲み会っスよ」

「そうか」

「神崎さん聞きましたよ、例の評価レポートの件！」

「えっ」

「中村課長が神崎さんのことベタ褒めなんだから、神崎さんも2階に来たら？」

「今日はダメだよ、今、連れと飲んでるんだからさー」

「あら、隣のお兄さん、神崎さんのお友達」

「初めまして、神崎龍人の彼女の田町由香里です、よろしくっス！」

そう言うと田町は金城に軽くウィンクした。

「えっ、神崎！ こんな美人の彼女がいたのか？ 俺はマジ悔しいぞ！」

「ごらあ〜！ 田町！ うそ言うな！」

田町はへへっと笑いながら少し舌をだして化粧室の方に走っていた。

「・・・ったく」

視線を戻して振り返ると金城が化粧室の方を向いて固まっていた。

「いい！ とつてもいい！ 由香里ちゃん！ す！ て！ き！」

神崎はビールをふいてしまった。

金城はどつやら本気らしい。

「えっ．．．マジか？ やめといた方がいいと思うけど．．．？」

「ほんとにおまえの彼女じゃないんだろっな？」

「ちがう、ちがう、ただの同僚だ」

「じゃ、俺が彼女をお嫁に貰っちゃう」

田町が化粧室から出てくると金城は立ち上って名刺を渡した。

「金城剛司と申します、よろしくお願いします」

「．．．？」

「由香里さん、よかつたら今度、俺のGTRと一緒にドライブでもいかがでしょう？」

GTRは日産のスポーツカーでスカイラインGTRのこと。

田町は受け取った名刺も見ずに金城の顔を3秒位見つめた。

「無理！ 以上！」

田町は神崎の頭を軽く叩くと笑いながら階段を上っていった。

金城は階段の方を向いてまた固まっていた。

「いい！ とってもいい！ 由香里ちゃん！ そんなに照れなくつても．．．」

神崎はまたビールをふいてしまった。

「はあ？ どんな感覚してるんだ！ 俺には理解出来ない！」



そう言つと両手を少し上にあげて店長の方を見た。

店長はバカ笑いしていた。

次の日の朝、神崎は少し寝過ごして会社の朝会ギリギリで出社した。

朝会が終わると田町に昨日の作業記録のPC登録を頼んだ。パソコン

「田町、昨日の作業記録をPCに入力しておいてくれ」

「昨日の作業記録って．．．私まだ神崎さんの業務報告聞いてないっすけど」

「ああ、もう記録表には記入してあるよ、昨日、別の事務員が書いてくれたんだ」

「えっ、別の事務員」

田町は赤いファイルを机の上から取るとファイルを開いた。

「あれえ、ほんとだ、記入してある」

「誰っすかね」

「誰っすかねって．．．派遣かアルバイトの女の子いるんだろう」

「いないっすよ、この事務所にいる女子事務員は私だけっすよ」

「えっ、田町だけ？」

「そっすよ」

それでは昨日の作業記録は誰が書いてくれたんだろう。

神崎は不思議に思った。

神崎は自分のデスクに座ると今日の業務スケジュールを確認した。

「え」と今日は、A社チップ構造解析、C社チップ熱応力評価、H社ポリシリコン接合評価と・・・それから明日はP社と新和開発社のサンプル返却予定日と・・・あ、忘れてた、

例のブラックウエハサンプルの返却日だったな、他社の評価を早く片づけて返却しないと」

神崎は時計を確認すると椅子から立ち上がり居室のドアを開けた。

評価室に向かう途中、隣の技術営業課の前を通り過ぎると今日も窓から中川の姿が見えた。

昨日の女子事務員はいないのかな？

神崎は部屋の奥の方を無意識に覗いていた。

部屋の奥はFAXやコピー機がずらりと並んでいる場所で各課の共用スペースになっていた。各課にあるパソコンの出力は一括処理されてこの場所で印刷されるシステムに

なっている。

昨日、廊下で擦れ違った女子事務員の姿を探したが見当たらなかった。神崎は少しがっかりしたが、もう一度時計を確認すると評価室へと向かった。

今日の評価業務が完了したのは21時頃だった。

神崎は本日分の評価サンプルを保管庫に片付けると返却予定のサンプルを保管庫から取り出して梱包作業を始めた。

サンプルはそれぞれ個別のウエハケースに収められていて、P社は汎用透明プラスチックケース、新和開発社は黒色の専用帯電防止ケースだ。

神崎はケースをアルミラミネート袋に入れると真空包装機にセットした。

装置のスタートボタンを押すと真空ポンプの動作音がして真空メーターの値が上がった。

メーターの値が - 55 KPa と表示されると真空包装は完了し装置は自動的に停止した。

神崎は梱包されたウエハケースを両手で抱えると搬出ブースにサンプルを置いて横のスイッチを押した。

搬出ブースの小窓を覗くとサンプルがクリーンルームの外へ搬出されて行くのが見えた。

神崎は田町のPHSに電話をかけた。

「田町はもう帰ったかな？」

電話は発信音を出し続けたが応答は無かった。

「今日はさすがに誰もいないか」

神崎は評価室のクリーンルームを出てクリーンウェアを着替える  
と表の通路からサンプルを取り出した。

「資材部の宅配最終発送時間は22時だったかな」

神崎は時計を見るとサンプルを両脇に抱えて解析技術課の事務所に  
向かった。

事務所の前まで来ると部屋の電気はもう消えていた。

神崎はサンプルを両脇に抱えたまま足の膝を少し上げて器用に事  
務所のドアを開けようとした。

その時だった。ドアが急に開いて中から女子事務員が出てきた。

神崎は一瞬体をそらして避けたが間に合わず中から出て来た女子  
事務員とぶつかってしまった。

「あっ、サンプルが！」

その時、右脇に抱えていたサンプルが落下してしまった。

神崎は慌てて右足を出すと足のつま先でサンプルの落下を何とか  
防いだ。

背中の方から「ごめんなさい！」と声がした。

「じらあ〜！ 田町！ 気を付ける！」

神崎がサンプルを持ち直して後ろを振り向くと女子事務員の姿が

通路の奥に見えた。

女子事務員は振返らずに通路を右に曲がって走っていった。

「田町．．．じゃないのか？．．．ん？．．．誰？」

後ろ姿を見ると田町では無かった。

田町は髪型がいつもショートカットだが通路を走る女子事務員の髪は長かった。それにわずかに香水の香りがした。田町は香水をつけない。

「この香り．．．」

神崎はこの香りを覚えていた。

「あの娘だ」

神崎はしばらく放心状態になっていたが気を取り直してサンプルを持ち直した。ドアを開けようとした時、下に何か落ちているのに気づいた。

神崎はサンプルを一旦下におろすと床に落ちていた白いハンカチを拾った。ハンカチから僅かに香水の香りがした。

神崎はハンカチを胸のポケットに入れると技術事務所のドアを開けて天井照明のスイッチを入れた。

サンプルを机の上に置くと胸のポケットからもう一度ハンカチを取り出した。ハンカチをよく見てみるとイニシャルが刺繍されてあ

った。

「イニシャルMA・・・」

神崎はしばらくハンカチを見つめていたが顔を上げると壁の時計を見た。

「いけね、時間だ、サンプルの出荷処理を早くしないと」

神崎は宅配の依頼伝票を田町の机の後ろにある書類ケースから取り出した。田町の机の方を見るとモニターは消えていたがパソコンのアクセスランプが点滅していた。

「あれえ、パソコンの切り忘れかな？」

神崎はモニターのスイッチを入れた。

モニターの画面が表示されるとスクリーンセーバーが表示されていた。

「パスワードがかかっているからパソコンの電源は切れないな」

神崎はモニターのスイッチを消した。

最近は省エネの取組みでパソコンとモニターの電源は就業後必ず消すことになっている。

「田町に明日注意してやるっ」

神崎は自分の机に戻って宅配の伝票処理を済ませると事務所の天

井照明を消して資材課に向かった。

### 第三章 ハッカー

次の日、神崎は朝会が終わると昨日の業務報告をまとめていた。

「え〜と、昨日はA社チツプ構造解析、仕掛、それからP社と新和開発社のサンプル返却完了．．．と」

報告書をパソコンで手短にまとめると田町にメール送信した。

「本日のお仕事は．．．と」

神崎は今日の業務内容を確認すると席を立って田町の机に向かった。

「田町、昨日の業務報告書をメール送信したから業務進捗管理表の記入してくれる？ それとね、新和開発社のサンプルを追加評価したんだ、技術管理サーバーの追加登録も

お願いするよ。あと、田町のパソコンの電源さあ、昨日入りっぱなしだったよ」

神崎が田町に声をかけたが、田町は何か困った顔をしてパソコンを睨んでいた。

「田町．．．聞いてる？」

神崎は田町の横から顔を覗いた。

「おかしい！ 絶対おかしい！ 技術ファイルがいくつか消えてる



しバックアップファイルまで消されてる！」

田町はモニターに向かってぶつぶつと文句を言っていた。

「神崎さんの評価データがみんな消されています！」

田町は振り返ると神崎と目を合わせた。

「たまちゃん、朝からきつい冗談はやめようね！」

「神崎さん、冗談じゃないです！ 本当です！」

「マジ？」

「うん、マジ！ マジ！」

神崎は上を向いて両手を上げた。

「うそ〜・・・はぁ・・・」

神崎が視線を田町に戻すと田町は泣きそうな顔をしていた。どうやらこれは本当の様だった。

「私、昨日は歯医者に行ったので18時にパソコン切って帰ったんです。なのに今日の朝見たらパソコンの電源が入ってました。なぜ？」

「なぜ？って俺に聞いても・・・」

二人が騒いでいるので解析技術課の連中もみんな田町の机に集まってきた。

「どうしたんだ神崎？」

中村課長も席を立ってこちらを覗きこんだ。

「技術ファイルの一部が消えてるみたいですよ。しかもバックアップファイルまで消えている様です。田町は消した覚えはないみたいなんですけど・・・」

「全部か？」

「いや、俺のだけみたいですよ」

「田町、みんなのは大丈夫なのか？」

「神崎さんのだけです・・・」

「田町、もう一度確認して見る」

中村課長は田町に再度確認する様に指示をしたがファイルはやはり消えていた。

「情報セキュリティ部に確認をしてもらおう」

中村課長は席に戻ると情報セキュリティ部に連絡をした。

「ああ、もしもし、解析技術課の中村ですよ、セキュリティ事故が発生しましたので緊急対応をお願いします」

「わかりました」

中村課長から連絡を受けて情報セキュリティ部の担当者が部屋に入ってきた。

課長が状況説明をすると担当者は田町のパソコンで技術サーバーのアクセスログを調べ始めた。

「このパソコンから技術サーバーへの最終アクセスは20時50分です」

「ええっ？」

「でも、田町さんのアクセスではありませんね。田町さんの最終アクセスは、えーと、17時50分ですね。17時50分以降のアクセスは20時30分、45分、50分、

最終のアクセス完了時間は21時15分。アクセス者は．．．アクセスコードA00135．．．このコードはテンポラリコードですね」

「テンポラリコードって何だ」

中村課長が担当者に質問をした。

「テンポラリコードはアルバイトとか派遣社員が使用するコードです」

「そうなのか」

「パスワードを入力しないとAAAの厳秘ファイルにアクセス出来ないはずなんですが．．．何故かアクセスしてますね、パスワードが入力されています。パスワードを事前に知

っていたか．．．或いは高度な技術でパスワードを解析したかのどちらかですね」

担当者は腕を組んで考えこんだ。

中村課長も腕組みをすると神崎の顔を見た。

「神崎、例のブラックウエハのデータも飛んだのか」

「ええ、たぶん飛びました」

「まあ、評価データは顧客に提出済みなので顧客からコピーしてもらえれば再登録は出来ますが．．．追加評価のデータを技術サーバ

ーに転送したのですがそれも飛びましたね」

「追加評価って何だ？」

「実は評価装置にちよつと不具合がありました．．．サンプルを再測定してみたのですが前回のレポートに無かった金属が検出されました」

「どんな金属？」

「ガドリニウムです」

「ガドリニウム？ まためずらしい金属だな」

「ええ、金属かどうかも知らないんですけど、造影剤とか超伝導磁石に使用される材料の様です」

「そうか．．．まあ、最悪、顧客に詫びを入れて再評価しないとだめだな」

「そうですね、当然、無償になります」

神崎も腕を組んで考えこんだ。

「データの復旧は可能ですか？」

神崎は担当者に尋ねた。

「サーバーメンテナンスを毎月していますのでメンテナンスサーバーに記録は残っていると思います。ただし、サーバーメンテナンス日以降の最近のデータは無理ですね」

「前回のサーバーメンテナンス日はいつ頃ですか？」

「確か2週間前です」

「はあ．．．そうですね、2週間分の仕事が水の泡か．．．」

神崎は少しため息をついた。

「アクセスコードA00135、星野由美、部署は技術営業課です」

情報セキュリティ部の担当者はアクセス者をセキュリティ登録リストから割り出した。

「隣の部署じゃないか」

中村課長は事務所のドアを開けると隣の技術営業課に入って行った。中村課長は技術営業課の課長と話し込んでいたがしばらくすると部屋に戻ってきた。

「みんな仕事に戻ってくれ！情報セキュリティ部もありがとう！この件は俺が責任を持って対応する！」

課長が指示を出すと情報セキュリティ部の担当者たちは自分の部署にもどっていった。

「神崎と田町はこっちに来てくれ」

課長は2人を呼んだ。

「星野由美はアルバイトの社員だそうだが、勤務時間は17:30～20:30らしい。彼女は今日はまだ出勤していないし、今、人事に連絡先を問い合わせているところだ。」

神崎はすまないが2週間前からの業務を出来る限りやり直してくれ、顧客への対応は俺がする。田町は他にもっと消されたファイルは無いか、時間がかかってもいいから調べ

てくれ」

課長は2人に業務指示を出すとまた隣の技術営業課に入って行った

「星野由美？ イニシャルはYHか？」

神崎は胸のポケットから昨日のハンカチを取出すとイニシャルを確かめた。

「イニシャルMAだよな、このハンカチ」

神崎はしばらくハンカチを見つめていた。

「それ、何っスか？」

田町が横から覗きこんだ。

「いや、何でもないよ」

神崎はハンカチを隠した。

「あつ、怪しっスね、ピンクの刺繍が入ってるじゃないっスか！  
これっスか？」

田町はそう言つと小指を立てた。

「違う、違う、絶対違う！」

神崎は笑つてごまかした。

「じゃなんっスか！」

田町はちょっと不服そうだった。

「まあいいじゃない、それより田町、仕事！仕事！」

神崎はまた笑ってごまかした。

神崎は自分の机に座るとノートを開いて業務記録の確認を始めた。

「さて、2週間前からの業務か．．．これは大変だなあ．．．チップの構造解析3件、チップ熱応力評価が2件と接合評価5件．．．評価サンプルが残っているのは、その内4件か．．．

ああ、頭が痛いな、こりゃ」

神崎はノートを見ながら両手を上にあげて伸びをすると田町の方を見た。

田町も必死でパソコンを睨んでいた。

午前10頃、情報セキュリティ部の担当者から田町のPHSに電話が入った。

「はい、田町です」

「情報セキュリティ部の新庄ですが、技術サーバーのファイル復元が完了しました。ああ、それから直近2週間分のデータですが、有る程度の復元が可能でした。田町さん

の方で確認して見て下さい、除去されたデータの90%位は復元出来ています。あと10%のファイルは物理記録領域に別のデータが上書きされて復元が不可能でした。以

上です」

「ありがとうございます、助かりました」

田町は担当者に礼を言うと紙の記録表を確認しながら電子ファイルの検索を始めた。

「神崎さん、ファイルの復元リストです」

振向くと田町がファイルリストを持って立っていた。

復元リストを受け取ると神崎はファイルを確認した。

ファイル数は108ファイルか・・・ノートの記録では俺が作成したのは115ファイルだ。

「田町、復元が不可能だったファイル名は何だ」

「えーと、N34600 - Black - Wfの関係ファイルが全て復元されていません」

ブラックウエハの評価ファイルか・・・

「まあ、この評価ファイルは顧客に提出済みだから問題は無いな」

後は追加評価のファイル1件のみ・・・これは評価装置内にデータが残っているはずだ。

「田町、よくがんばったな、ありがとうな」

神崎は田町に礼を言った。

「お礼はいいっすよ」



田町は神崎に褒められて嬉しそうだった。

神崎はポケットからPHSを取出すと生産技術課の吉田に電話をかけた。

「ああ、吉田君、解析技術課の神崎です。この間、試作中の評価装置で測定した例のブラックウエハ再測データはまだ装置内に残っているかな？」

「ええ、まだ残っていますよ、装置の完成まであと3日程ありますからね、大丈夫です。再測データを評価装置から取出して分光解析サーバーに入れましょうか？」

「ああ、そうしてもらえると助かる、後はこちらでリモート操作するよ」

「サンキュー、よし、これで問題はほぼ解決と・・・」

神崎は仕事の目処がたったのでほっとした。

「よし、フェニックス社の営業部に電話して提出済みの評価データを、一旦、返却してもらおうとするか？」

神崎は取引先の名刺入れを引出しから取出すとPHSでフェニックス社の営業部に外線電話をかけた。

「はい、フェニックス社営業部です」

フェニックス社営業部の女子事務員が電話対応した。

「新光技術工業社解析技術課の神崎と申します、御社営業部長の獵田様をお願いします」

「はい？ 神崎様もう一度お名前をお願いします」

「営業部長獵田様です」

「神崎様、申し訳ございませんが弊社営業部長は田代でございます、部長の田代ならおりますが．．．」

「えっ？ 田代．．．部長様ですか？」

「いえ、私がフェニックス社様から頂いた名刺には営業部長獵田博久と書かれているものですから」

「少々お待ち下さい、獵田博久ですね？」

「．．．」

しばらく返事が帰ってこなかった。

「神崎様、申し訳ございませんが弊社の社員で獵田博久という社員はおりませんでした。田代の間違いでは御座いませんでしょうか？」

神崎は戸惑ってしまった。

「わかりました、御社の田代部長様で結構です」

「では、部長の田代に電話をおつなぎ致します、少々お待ち下さい」

「．．．はい、営業部の田代で御座います」

「毎度お世話になります、新光技術工業社解析技術課の神崎と申します」

「はい、何でしょうか」

「実はですね．．．御社様に提供致しました新和開発社様のウエハ評価の件なんです、大変申し訳ないのですが評価データを一旦、返却願えませんでしょうか？ 新たに追加

評価も発生致しまして評価資料を再作成させて頂きたいのですが、もちろん無償で対応させて頂きます、いかがでしょうか？」

神崎は顧客に失礼の無い様に丁寧な対応をした。もちろん自社の内部事情は話さなかった。サーバーからデータが消えたことを顧客に知られると自社の信用が台無しになる

からだ。

「新和開発社様のウエ八評価ですね、失礼ですが神崎様、弊社の注文管理Noを教えてくださいませんか」

「えーと、注文管理Noは・・・」

神崎はノートのページを開くと注文管理Noを調べた。

「注文管理NoはA560401です」

「A560401ですね、わかりました調べさせて頂きます、こちらからまたお電話を差し上げますので少々お待ち下さい」

「お願い致します」

しばらくすると、PHSに外線が入った。

「はい神崎です」

「神崎様、お待たせ致しました営業部の田代で御座います。ご依頼の件ですが注文管理NoA560401はありませんでした。注文管理Noの間違いではないでしょうか？」

「

「いえ、確かに注文管理NoA560401でウエ八の構造解析依頼となっています」

「神崎様、それと新和開発社様のウエ八評価はここ半年程、弊社に注文が入っておりません」

「そうですか？」

「わかりました、対応ありがとうございます」

神崎はPHSの電源を切ると首をかしげた。

「どうかしました神崎さん」

田町が聞いた。

「いや、変なんだよ、フェニックス社はブラックウエハの評価依頼を出していないと言っただ」

「えっ？」

「それに、この間、会社に来たフェニックス社の営業部長と名乗る男は偽者の様なんだ」

「えっ、それじゃあ、その男は誰っすか？」

「さあ？ 俺もわからないけどブラックウエハの評価データが盗まれたことは確かだ」

神崎は腕を組んで考えこんだ。

「そっだ、受注を取ったのは中川だ、中川に聞いて見よう」

神崎は事務所のドアを開けると隣の技術営業課に入って行った。

中川は電話をしていた様だったが神崎の顔を見ると電話を切った。

「あっ、先輩！」

「中川ちよつと話があるんだが」

「先輩！ 俺も話があるんですよ！ フェニックス社の営業部長と全然連絡が取れないんですよね」

「いつからだ」

「昨日からです」

「フェニックス社の営業部長ってこいつか？」

神崎は獵田の名刺を見せた。

「そうです、昨日までこの名刺の携帯に連絡してたんですけど今日はさっぱりつながらなくて・・・」

「中川！ こいつはフェニックス社の営業部長じゃないぞ、偽者だ！」

「また、また、先輩、冗談はやめましょうよ」

「ほんとだつて、さっきフェニックス社に電話して確認したんだ、営業部長は田代という男だ」

「えっ、じゃあ俺の3億の商談はどうなるんですか？」

「そんなの嘘に決まってるだろう」

「えっ」

中川は腰が抜けて床にへたりこんでしまった。

神崎は腰の抜けた中川を何とか椅子に座らせた。

「中川、まあ落ち着け、命を取られた訳じゃないだろ」

「そりゃそうですけど、これじゃ俺のサラリーマン人生も早終わりますよ」

「大丈夫だよ、この件は公にならないよ」

「何ですか先輩」

「よく考えてみるよ、損害は何も出てないじゃないか、それに顧客の情報盗難事件を会社がわざわざ外部に発表することはないさ。それより新和開発社の営業部門の連絡先を

教えてくれ、発注が本当にあったかどうか確かめてみたい。フェニ

ツクス社はただの中間業者さ、ウエ八の構造解析を依頼をしたのは新和開発社だ」

「そりゃそうですね、評価サンプルは存在してますからね」

「それにあのサンプルは最新の300mmウエ八だ、あのウエ八を作るメーカーは日本にそうはないさ」

中川はパソコンに厳秘のパスワードを入れて顧客リストを検索した。

「先輩、ありました、新和開発社技術営業部門の電話番号です」

「俺が電話しましょうか」

「そうだな、中川は営業担当だから、それと無く聞けば矛盾はないだろう」

「お願いするよ」

中川は新和開発社技術営業部門に電話をかけた。

「毎度お世話になります新光技術工業社技術営業課の中川と申します、実はですね・・・」

中川は苦戦している様だった。

通常、一流メーカーは量産ウエ八以外の試作評価を外部に委託することはあまり無い。あったとしても秘密保持契約を交わしてその情報を隠しているからだ。

「中川、ちよつと電話を代わってくれ」

「えっ、ちよつと待って下さい、はいどうぞ」

「もしもし、新光技術工業社解析技術課の神崎と申します、いつもお世話になります」

いつもお世話になってないが・・・神崎は心の中でつぶやいた。

「ええ、何かの間違いだと思うのですが新和開発様からの試作品評価依頼を1件受けておりまして・・・」

新和開発社の回答は外部への評価委託はここ半年出していないとのことだった。

「そうですね、弊社技術営業課の手違いかと思えます、失礼致しました。それでは失礼・・・そうそう、そのウエ八なんですが実は真黒なウエ八でして・・・」

「えっ！ 真黒なウエ八？」

「ええ、そうなんですよ真黒なウエ八なんですよね」

新和開発の技術営業担当者の声のトーンが少し変わった。

「もしもし、そのサンプルウエ八は新光技術工業社様が保管されているのですか？」

「いえ、もう評価依頼元に返却致しました」

「そうですか、何れにしましても弊社から新光技術工業社様への評価依頼はありません」

「はい、承知致しました、ご対応ありがとうございます、失礼致します」

神崎は丁重な対応をとって電話を切った。

「中川、新和開発社は本当に評価依頼を出していない様だ」

「そうみたいです、先輩」

「ただし、ブラックウエ八の研究はきつとこの会社がやっているん

だよ、極秘の様だな」

「極秘のウエ八が何故うちの会社に回ってきたんですか」

「理由は分からないが、多分、社内の内部リークだ」

「内部リーク？」

「そう、誰かが極秘のウエ八を持ち出したんだよ」

「何の為にですか？」

「製造方法を解析する為さ、中川、聞いて驚くなよ、ブラックウエ八一枚の値段は推定で1兆円だ」

「えっ！ 本当ですか先輩！」

「ああ、たぶんな、このウエ八の量産技術を手にすれば巨大な利益を手にすることが出来るんだ」

中川はまた腰が抜けて床にへたりこんでしまった。

神崎は中川に手を出してまた椅子に座らせた。

その時、神崎のポケットのPHSが鳴った。ポケットからPHSを取り出すと神崎は通話ボタンを押した。

「はい、神崎です」

「神崎君、特別会議室に今すぐきてくれないか、人事にセキュリティ事故の報告をするから田町も連れて来てくれ」

「はい、わかりました」

特別会議室のドアをノックして中に入ると奥の席に中村課長の姿が見えた。中村課長の前には技術営業課の村田課長と人事部の富田部長が座っていた。

「まあ、2人ともここに座ってくれ」



中村課長が言った。神崎と田町は中村課長の横に座った。

「今日の件だが．．．技術サーバーの情報を消した犯人はどうやら技術営業課アルバイト社員の星野由美のようだ。人事部に星野由美の連絡先を確認してもらったんだが連絡がつかなくてね。それで人事登録されている彼女の住所に行ってみただが．．．その住所は空き地だったよ。人事面接の記録では日亜大学1回生となっているんだが．．．それも嘘だ」

。日亜大学に問い合わせたが星野由美という学生はいなかったんだ。

「えっ？．．．じゃあ彼女は誰なんですか」

「我々にも分からない」

中村課長は両手を上げた。

「村田君、彼女の勤務はどうだったんだ、怪しいところは無かったのかね？」

人事部の富田部長が技術営業課の村田課長に質問した。

「ええ、特に怪しいところはありませんでした。パソコンが得意という事でしたので主に営業事務を担当してもらいました。仕事は良く出来ましたし電話の対応等は非常に丁

寧で正社員が見習って欲しい位でした。ただ、資料の印刷やコピーを頼んだ時に結構時間が掛かる時がありましたね。印刷室で情報を閲覧していた可能性はあります」

村田課長が答えた。

「人事としてはアルバイト採用面接も実施しているし、学生証の提出もさせているので問題は無いと思っていたんだが．．甘かったな」

「それにしても、何故、神崎君の技術データだけが盗まれたのかわからないな、他に重要な技術情報は沢山あるはずだが．．」

富田部長は腕を組みながら残念そうに話した。

「狙いはブラックウエハの解析評価データだと思います。技術サーバーからデータが復元出来ない様に完全に消されていますので間違はありません。それと、変なんですよ、

フェニックス社はブラックウエハの評価委託注文を実は出してないんです。おまけに、この前うちの会社に来た獺田と名乗る男はフェニックス社の社員ではありませんでした

。念の為に委託元の新和開発社に連絡をとったんですが、やはり評価依頼は出されていませんでした」

「何だつて、じゃ3億の受注契約はどうなったんだ」

「契約はうそです、中川が騙されたんです。我々はうその契約を受けてブラックウエハを評価し、そのデータをまんまと盗まれたことになります。まあ、ただ働きですね、

ただし、実質的には何の損害もありません。損害があったとすれば評価に使った私の作業時間と技術サーバーの修復時間くらいでしょうね。私も何がなんだかわかりません」

神崎も両手をあげて答えた。

その日の夕方、人事部から情報セキュリティ強化の社内通達が発行された。

## 第四章 ハンカチの持主

神崎は定時で仕事を終わると机の上を整理して帰り支度を始めた。

「今日は何だか疲れたな．．．一息入れるとするか」

「あれっ、神崎さんもう帰るんすか、めずらしく早いっすね」

田町が神崎に声をかけた。

「ああ、今日はちょっと元気が出ないね、気晴らしに連れと飲み行ってくるよ」

「連れって．．．例の筋肉男っすか？」

「そうそう、例の筋肉男っすよ、俺の親友でね」

神崎は田町の言葉を真似て答えた。

「私も行っていいっすか」

「え、何で？ほんとに行くの？」

「うん、行く行く、私も片付けるからちょっと待ってね」

「マジっすか」

「うん、マジ、マジ」

田町も机の上を片付け始めた。

神崎はセキュリティカードをかざして会社の門を出ると駅前まで田町と待ち合わせた。

しばらくすると田町がやってきた。

「神崎さん、定時で帰るなんて久しぶりっスね」  
「そうだな、こんなに早く帰るのは半年に1回位かな、貧乏暇無しだね」

神崎と田町は駅前の居酒屋に向かって歩き始めた。

歩きながら田町は鼻歌を歌っていた。

「お前、何だか嬉しそうだな、今日はさんざんな日だったのに」  
「嬉しいっスよ、今日は神崎さんと二人でデートっスからね」  
「違っつて、俺の連れと3人で飲むだろうが」  
「いいの、いいの、気にしない、気にしない」

田町はいつになく上機嫌だった。

二人は居酒屋の暖簾をくぐった。

「いらっしやい」  
「あれえ、今日は空いてるね」  
「いえ、こんなもんですよいつも、まだ時間が早いですからね」  
「ああ、そうか、俺が早いのか」

神崎は腕時計で時間を確認した。17時30分だった。

「カウンターにされますか、テーブルにされますか」  
「カウンターでいいよ」

神崎と田町はカウンター奥の角に座った。

「とりあえず生ビールと枝豆」

「はい、注文喜んで」

「はい、生1丁」

若い店員は威勢がよかった。

「あれっ、神崎さん、連れを待たなくていいんすか」

「全然OKだね」

「あいつ、今日は18時に来るんだ、待つてられないね」

注文はすぐに出てきた。

「田町とりあえず乾杯しよう」

「神崎さんと乾杯っすか、うれしいっすね」

「乾杯！」

神崎と田町が一杯やり始めると店の奥から店長が出てきた。

「あれっ、神ちゃん今日は早いね」

「おお！ それに女連れてるし、めずらし〜」

店長が神崎を冷やかした。

「俺の職場の同僚だよ店長」

「愛人の田町由香里で〜す！ 店長よろしくっす！」

神崎は飲みかけたビールをふいた。

「あっ、思い出した！ 2階に来てた娘だね！ 金ちゃんを一撃でノックアウトした娘だ！」

店長は笑った。

「愛人の田町由香里で〜すって、俺だからいいけど他の人だったら本気になるぞ、その冗談あっちこちでやってるんだろっ」

「神崎さんバレたっスか」

「何人か本気になっただろっ」

「3人位かな？」

「えっ！ マジで！」

「ふふふ、冗談ですよ！ でも神崎さんならOKっスよ！ 何なら今日お持ち帰りします？」

田町は右目を閉じて神崎に軽くウインクした。

神崎はひっくりかえりそうになった。

「ハハハ、言うね！ 由香里ちゃん！ 神ちゃん、この子大物だぜ！ 気に入った！」

店長はバカ笑いした。

18時過ぎ、金城が店に入ってきた。

「店長！ 毎度！」

「おっ！ 金ちゃん、いらっしやい！」

「奥で二人がお待ちだよ」

「二人？」

金城はサングラスを外すと神崎を探した。

「おお！ 由香里ちゃん！ 発見！」

金城は大喜びでカウンター席に向かった。

「神崎！ 由香里ちゃんが来てるんならTELLしてくれよ！ もっと早く来たのに！ 由香里ちゃん！ どうしたの！ 今日は？」

金城は神崎の席を通り過ぎて田町の横に座った。

「出たあゝ筋肉男！」

田町は体を避けると神崎にしがみついた。

「また、また、由香里ちゃん、照れちゃって、もおゝ」

「神崎さん、この人ちよつと頭のネジ外れてる？」

「うん、たぶんね」

「由香里ちゃん冗談うまいんだから」

「重症っスね」

田町は金城の顔を見上げた。

「ところで神崎、さっそくだけだな、おまえから預かった例のハンカチ、情報は掴んだぜ！」

金城は急にまじめな顔になった。

「えっ！ もう分かったのか！ 今日の昼休みにおまえに預けたばかりなの？」

神崎が驚いた。



「あたり前さ！ 俺はプロの探偵だぜ！」

金城は自慢げに言った。

「探偵って言うけど、お前いつも浮気調査ばかりやってるじゃないか、ほんとにかよ？」

「おバカ！ 何を言ってるんだ由香里ちゃんの前で！ 俺のイメージが悪くなるだろう！」

金城が頭を抱えた。

最初からイメージ悪いんだけどね、早く気付けよ……

神崎は心の中でつぶやいた。

「筋肉？ 何の話してるの？」

田町は神崎の腕を掴みながら金城に質問した。

「おお、由香里ちゃん、興味あり？ でもね、俺もプロの探偵だから依頼者の許可無しでは話せ無いだよね」

金城はそう言つと神崎の顔を見た。

「まあ、いいよ金城、彼女も被害者なんだ、聞く権利はあるよ」

神崎は答えた。

「実はね、今日の昼に神崎から調査依頼を受けたのさ、ハンカチの

持ち主を探してくれってね」

金城はポケットからビニールに入ったハンカチを取り出して田町に見せた。

「ああ、知ってるこれ！」

田町は金城からハンカチを取り上げた。

「神崎さん・・・怪しいっス？」

田町は神崎の顔を下から覗きこんだ

「あれっ、由香里ちゃん知ってるの？」

金城が言った。

「ポケットに隠したやつだよ、神崎さん？ やっぱりコレっスか？」

田町はそう言うつと小指を立てた。

「これは星野由美のハンカチなんだ、技術データが盗まれた時に俺は彼女に会ってるんだ」

「マジっスか、神崎さん！」

「ああ、技術事務所から出て来た星野由美と偶然ぶつかったんだ。その時に彼女はハンカチを落としたのさ。まさか技術データを盗んでいたなんて知らないからさ、今日返

してやるうと思ってたんだ」

神崎は田町にハンカチのことを話した。

「そうそう、それでさ、神崎は会社に内緒で俺に調査を依頼したってわけさ、わかった？ 由香里ちゃん？ だからコレじゃーないわけよ！」

そう言うと金城も小指を立てた。

「だいたい、神崎は仕事のやり過ぎさ、ワーカーホリックなんだよ！ それじゃー彼女も出来ないぜ！ でもね由香里ちゃん、神崎は学生時代はかなりモテたんだぜ！ バレ

ンタインの日なんか、神崎の机の中はチョコレートだらけさ。俺はいつもそのチョコレート食ってたけどね、ガハハハ！」

ワーカーホリックは仕事中毒のこと

金城はバカ笑いした。

「店長！ 俺も生ビール」

「はい、注文喜んで！ 生1丁ね！」

店長は威勢よく注文を取ると、すぐに生ビールを持って来た。

「まっ、とりあえず乾杯するか！」

神崎はそう言うとビールジョッキを持ち上げた。

田町もビールジョッキを持ち上げた。

「乾杯！」

3人はジョッキを重ねた

「やっぱりうまいね！ 仕事後のビールは最高だね！」

金城はごくごくとビールを飲んだ。

「ところで、本題のハンカチの持ち主はどうなんだ」

神崎が金城に聞いた。

「うん、それなんだが、このハンカチの周囲の刺繍を見てくれ、この刺繍はレースになってるだろう？ この刺繍はオリジナルさ。このハンカチはその辺の市販品じゃない、

俺はこの刺繍に目をつけたんだ。手縫いなんだぜ、これ。それに、この刺繍の柄はどこかで見えたことがある」

金城はハンカチの情報を話始めた。

「何処なんだ？」

神崎が尋ねた。

「となり町の、刺繍専門店だ、一発でヒットしたよ、手縫いで、糸はピンク、イニシャルMA、これを注文したのは一人だけだったよ」

金城が答えた。

「誰なんだ？」

神崎の声が少し高くなった。

「これを注文したのは女子学生だ、正確に言うと高校生だ」

金城が答えた。

「高校生？　それで、その高校は何処にあるんだ？」

神崎の声がまた少し高くなった。

「高校は桜川情報高校だ、ここから電車で30分位のところにある高校さ。桜川情報高校の学生名簿を調べたんだがイニシャルMAは3人いるんだ。荒川真紀、足立愛美、相

川真理。そして、刺繍専門店にハンカチの注文をしたのは3年生の相川真理だ。星野由美の正体は相川真理だ、間違い無い」

神崎は驚いた。

「高校3年生・・・」

田町は神崎の顔を覗き込むと目の前で手を振った。

神崎はボーとして気が付かなかった。

「あっ！　神崎さん！　魂抜けてる！　トランス状態っス！　こちら！　神崎！　戻ってコーイ！」

田町が神崎の頭を叩いた。

「おおっ！ 何するんだ田町！」

神崎は振向いて田町の顔を見た。

「帰って来たっス！」

田町が笑った。

「ハハハ！ 由香里ちゃん！ 面白い！ 面白い！」

金城もバカ笑いした。

次の日、神崎は午後から早退した。

ロッカーで背広に着替えると会社の門を出て駅に向かった。駅に到着すると神崎は桜川行きの電車に乗り込んだ。

昼間なので電車は空いていた。

神崎は椅子に座ると売店で買ったスポーツドリンクを飲み干した。

「ああ、昨日はちょっと飲みすぎたかな、田町も金城も酒豪だから同じ調子で飲むと倒れそうだ」

窓の外を見ながら小声でぼやいた。

神崎は背広のポケットから例のハンカチを取り出した。

ビニールを空けて中からハンカチ取り出すと僅かにラベンダーの香りがした。

神崎はハンカチを眺めた。

相川真理はどんな人物だろう・・・そしてデータを盗んだ理由は何だ？

神崎は心の中でつぶやいた。

## 第五章 少女

桜川の駅を出ると神崎は金城の携帯に電話をかけた。

「もしもし、ああ、俺だ」

「神崎か、今何処だ」

「桜川駅を出たところだ、駅前の東口にいる」

「ちよつと待つてる、すぐに行くから」

神崎は携帯を切ると金城を待った。

しばらくすると駅前の喫茶店から金城が出てくるのが見えた。

二人は駅前から歩いて桜川情報高校に向かった。

駅前から桜川情報高校までは緩い上り坂になっていて道の横には小さな川が流れていた。川の周辺には桜の木が一定間隔で植樹されている。

「綺麗な道だな、これが桜川か？」

神崎が金城に聞いた。

「ああ、そつだ、綺麗なろう、明治時代に整備された川さ、上流には桜川神社があつて、春には桜祭りがある、ちよつとした観光名所なんだ。桜川情報高校は神社のすぐ近く

にあるんだ、あれがそつさ」



そう言うと金城は丘の上を指さした。

「なあ神崎、俺にはよくわからないんだが盗まれたデータは素人でも意味の解るものなのか？」

「いや、解らないだろうな」

「じゃあ何でそんなもん盗んだんだ」

「俺もそれが知りたいんだ」

少し歩くと桜川神社に着いた。

小綺麗な神社で神社の鳥居から本殿が見えた。

「この神社の裏が桜川情報高校だ」

二人は神社の左側に続く小道に入っていった。

両脇は見事な桜並木になっている。

「午後15時半かあ、学生が出てくるのは午後16時位からだ」

桜川情報高校の校門に着くと金城は腕時計を確認した。

「まあ、ここで3時間位張り込めば相川真理を捕まえられるだろう。とはいえ、俺は相川真理の顔を知らないから、神崎、お前見逃すな」

金城は神崎の肩を軽く叩いた。

二人は校門の横の壁に持たれて相川真理が出てくるのを待った。

午後16時過ぎ、校門を出る学生の姿が見え始めた。

「あれっ、ここの学生、女子が多いなあ」

「そうさ、この学校はもと女子高だからな、大半は女子さ」

神崎は少し不安になった。

午後17時過ぎ、校門を出る学生の姿が増え始めた。

神崎は相川真理を探したがそれらしき人物はなかなか見つからない。

午後18時になった。

「あれえ、なかなか出てこないな、金城」

「まあ、焦るな、必ず出てくるさ、この高校は裏が山だからここからしか出入り出来ないのさ」

午後18時を過ぎた頃、メガネをかけて頭をポニーテールにした女子生徒が前を通り過ぎた。

「やばい、制服着てるとみんな同じに見えるな」

神崎がため息をついて振り返ろうとした時、ポニーテールの女子生徒の後ろ姿が見えた。後ろ姿がなんとなく彼女に似ている様気がした。それにスタイルが抜群だ。

「あれっ、もしかして、この娘？」

神崎は金城の腹を肘で突付いた。

「あの娘か？」

「ああ、そんな気がする」

「そんな気がする？ 神崎、お前、彼女の顔見たことあるんだろう？」

「ああ、でもメガネはして無かったし．．．背も高かったんだ」

「女は化けるからな」

「でも、後ろ姿がよく似てるんだ」

神崎と金城は彼女の後を追った。

「神崎、尾行するか？」

「いや、堂々と聞かさ」

そう言つと神崎は彼女の後ろから声をかけた。

「星野由美さん」

彼女は少しビクつとして立ち止まった。

そしてゆっくりと振り返った。

「星野って誰ですか、人違いじゃありませんか？」

そう言つと彼女は神崎を見つめた。

「そうだね、人違いの様だ、相川真理さん」

彼女はしばらく沈黙していたが、少し上を向いて「ふうっ」「とため息をついた。

「バレてますか．．．そうですか．．．」

少し首を傾げて神崎を見上げた。

「私を警察に突き出す気？」

「いや、そんなことはしないさ、会社の信用が落ちるだけだからね」

「えっ？　しないの？」

「ああ、技術データを盗んだ理由を知りたいだけさ、俺の個人的興味でね」

「それだけ？」

「そう、それだけ」

相川真理は少し下を向くと神崎の顔をもう一度見直した。

「盗んだ理由か．．．そうねえ．．．私の個人的理由かな？」

「えっ？」

「そう、個人的理由よ」

相川真理はそう言うと金城の方を見た。

「ねえ、あの筋肉マンみたいな人は誰？」

神崎が後ろを振り返ると金城が携帯で誰かと電話をしていた。

「えっ、何？　ホテルに入った？　別の愛人だって？　うんうん！」

どつやら仕事の話らしい。

「俺の友人でね、探偵をやってるんだ」

「探偵？」

「そう、いつも浮気調査ばかりやってるけどね」

金城は携帯を切るとこちらにやってきた。

「悪い、神崎、ちょっと仕事が入ったから行ってくるよ、一人で大丈夫か？」

「ああ、大丈夫さ」

「じゃあ、お任せするよ、本日の無料サービスは終了ということですのでよろしく」

そう言つと、金城は神崎の肩をポンと叩いて行ってしまった。

「相川さん、ここじゃ何だから、場所を変えよう」

神崎と相川真理は桜川神社まで歩くと神社の小さな茶屋に入った。

二人は茶屋の窓側の席に座った。

窓から外を眺めると神社の古木の間から夕日の木洩れ日が差し込んでいた。

「珈琲でいいかい？」

「私、お茶でいいわ」

神崎は店員を呼ぶと注文を出した。

「ねえ、神崎さん、私をどうやって見つけたの？」

「ハンカチさ」

「ハンカチ？」

「そう、俺とぶつかった時、君はハンカチを落としたのさ」

「．．．」  
「ハンカチを手掛かりにして金城に君を探してもらったんだ。」  
「そっかあ、私のミスね、絶対にバレないと思ってただけどなあ．．．残念！」  
「そう、バレたんだから諦めて話してくれるかい？」  
「うん．．．そうねえ」

相川真理は窓の外を眺めた。

「あのウエ八はね、私の父が作ったものなの」  
「君のお父さん？」  
「私の父は新和開発社の主幹研究員だったの、先端技術開発研究部の開発部長だったわ」  
「ええ！ 新和開発社？」  
「昨年、父は研究所で起こった実験事故で亡くなりました」  
「．．．」  
「事故で亡くなる前、父は会社の荷物を持って帰ってきたの」  
「それはもしかしてブラックウエ八？」  
「そう、ブラックウエ八よ」  
「父は夢中だったわ、真理、真理、凄いうエ八が出来たんだよ！ ってね。とにかく、凄い、凄いつて叫んでた。あの時の嬉しそうな父の顔は忘れられないわ、でも次の日、研

究所で実験事故が起こって父は死んでしまった」

相川真理は少し涙目になった。

「父は、ブラックウエ八の試作品を2スライス作ったの、神崎さんに評価してもらったのは予備のウエ八よ、もうひとつのウエ八は事故で燃えてしまったわ。ブラックウエ八

は偶然出来たと父は言っていました。父は実験で材料レシピに無い何かを偶然混ぜてしまったの、だから、その材料を見つけないと量産出来ないと言っていました。今、新和開発

社はその材料を必死で研究してるわ、でもまだそれは見つからないみたい。父は内緒で予備のウエ八を持ち帰ったから、会社の人にはそれを知らないの。ただ、1人だけそ

れを知っている男がいたわ。元、父の部下で金田と言う男。あなたの前では獵田と名乗った男よ」

「何だつて！ 獵田？」

「そう、あの男も、ブラツクウエ八の秘密を狙ってるの。今は会社を辞めて軍事関係の半導体技術アドバイザーをやってるわ。ブラツクウエ八の特許を独占しようとしている

の。あの男が先日私の家に訪ねて来たのよ。予備のウエ八を1億円で売ってくれないかってね。私は断ったんだけど、母はその価値を知らないから金田にウエ八を売る約束を

してしまったのよ。仕方が無いから、私は金田にウエ八を渡すことにしたの、でもひとつだけ条件を付けたわ。ウエ八の解析は新光技術工業社の神崎という男にさせて欲しい

つてね。その条件を金田は律儀に守ってくれたわ」

「えっ？ 何故うちの会社で俺なんだ？」

神崎は驚いて口を開いたままポカンとした。相川真理がウエ八の解析に新光技術工業社と神崎を指名したのが以外だったからだ。

「私の父の名前は真一なの」  
「真一．．．相川真一．．．」

聞き覚えのある名前だった。

「えっ、相川真一！もしかしてお父さんは大学教授だった？」

「そう、6年前までね」

「思い出してくれた、神崎さん！」

相川教授は神崎の大学時代の恩師だった。

「じゃあ、君は相川教授の．．．」

「私は神崎さんのことをよく覚えてるわ、よく家に遊びに来てくれたもの。あなたによく遊んでもらったわ、あなたは私のことを覚えてる？」

神崎は大学時代のことを思い出した。

相川教授は気前のいい人で貧乏学生の神崎をよく自宅に呼んでくれたものだった。

「えっ、じゃあ．．．真理ちゃん！あの時はまだ小学生だったよね！」

「そうよ小学6年生だった」

「えっ！うそー！本当？」

「本当だつてば、本人が言ってるんだから！」

「ハハハ！そうりゃそうだ！」

神崎は笑った



神崎の様子を見て相川真理も笑った。

「でも、まだ分からないな？ もう一回聞くけど何故うちの会社で俺なんだ？」

神崎は両手を広げて相川真理にその理由を再度尋ねた。

「父は神崎さんのことを家でよく話してたわ、大学を首席で卒業しながら三流の評価設備メーカーを自分で希望して就職した変わりものだって。でも、父はあなたのことをと

ても気にいってたわ、反骨精神旺盛だけど強い信念を持ってるって、10年に一度出るか出ないかの天才だとまで言ってたわ。ブラックウエハが偶然出来た時も、新光の神崎

なら絶対に分析出来るはずだと父は言っていました。私は生前の父の願いを叶えてあげたいと思ったの。だから神崎さんの手元にウエハが届くことを条件として金田にウエハを

渡したの。金田もその点は利害が一致するから、その条件をのんでくれました。それが私の個人的理由、そして神崎さんはそれを見事に分析してしまってたわ」

「いや、いや、分析出来たのは偶然さ、実力じゃないよ」

神崎はそう言うと首を小さく左右に振った。

「それにしても驚いたなあ！ あの真理ちゃんだったとは夢にも思わなかったよ！」

「ごめんなさい神崎さん！ 私、謝ります！ あなたとあなたの会社を利用してしまったこと！」

そう言つと相川真理は両手をテーブルにつけて頭を下げた。

「分かつた！ 分かつた！ 真理ちゃん頭を上げなよ！ 許してあげるからさ！」

「本当！ 許してくれる？」

「ああ、本当さ！」

相川真理は顔を上げると神崎の目を見つめた。

「うふっ、神崎さんはやさしいわね、昔とちつとも変わらない！」

神崎は胸がドキドキして思わず窓の外を見てしまった。窓の外を見ると夕日が山に沈みかけているのが見えた。

神崎はカップに手をやるとコーヒーを飲み干した。

「ねえ、真理ちゃん、ひとつだけお願いしてもいいかい？」

「えっ、何ですか？」

「メガネを外してくれないか？」

「えっ？ メガネですか？ いいですけど？」

そう言つと相川真理はゆっくりとメガネを外した。相川真理の素顔は美しかった。

「これ、だてメガネ何ですよね、バレちゃった？」

「いや、バレてないんだけど・・・ちよつと確認しただけさ」

「確認？ 何の？」

「いや・・・ちよつとね」

神崎は返事に困ってしまった。相川真理の素顔が見たかっただけだからだ。

「綺麗だね」

「えっ？」

「夕日がさあ・・・」

「・・・？」

「帰ろうか、真理ちゃん」

神崎は笑いながらもう一度窓の外を見た。もう夕日は沈んでいた。

「夕日がねえ・・・」

相川真理は神崎の横顔を見て微笑んだ。

帰り道、桜川の駅前まで神崎と相川真理は一緒に歩いた。駅前商店街の前まで来ると相川真理が一軒の店を指した。

「ねえ、神崎さん、ここ私の家なの寄って帰らない？」

そこは小さな化粧品屋だった。

「えっ、化粧品屋じゃないか」

「ええ、母が経営してるの、ちょっと寄ってよ」

相川真理は神崎の肘に手を回すと腕をつかんで引っ張った。店の中に入ると香水のとてもいい香りがした。

「お母さん、ただいま！」

「お帰り、真理」

「めずらしいお客さんを連れて来たわよ」  
「誰かしら？」

相川真理の母は振り向くと神崎の方を見た。

「あら！もしかして神崎さんじゃないの？」  
「ご無沙汰してます」

神崎は頭を少しかきながら照れくさそうに挨拶をした。

「お久しぶりね！何年ぶりかしら？」  
「大学を卒業してから6年になります」  
「まあ、そんなに経つかしら？」  
「立派になったわね、スーツを着てると見違えるわ」  
「昔は長髪でいつもTシャツとジーパンだったものね」  
「結婚は？」  
「いえ、まだ独身です」  
「あら、そう、こんなにいい男なのにね」

神崎は下を向くとまた頭をかいた。

「引越しされたんですね」  
「ええ、ここは私の実家なのよ、昨年、主人が亡くなってから引越したの。あっ、神崎さんは知らなかったわよね、相川が亡くなったこと」  
「ええ、先程、真理さんから話を聞いたところです。相川教授には随分とお世話になりました、ほんとに残念です」

神崎は頭を下げた。

「神崎さん、今日は時間あるんでしょ」

「まあ．．．ありますけど」

「うちで晩御飯食べて行きなさいよ」

「えっ？」

「そうしましょう、ね！ 神崎さん！」

「賛成！」

相川真理が嬉しそうに手を上げた。

その日、神崎は相川真理の家族と一緒に食事をした。

神崎は学生時代に相川家でよく食事をご馳走になっていた。真理の母は神崎の好物を覚えていて神崎の好みの料理を出してくれた。真理の母は昔から料理がとても上手だ。

食卓では神崎と相川教授の思い出話に花が咲いた。

「今日のご馳走様でした」

神崎はお腹を摩りながら礼を言った。

相川真理の家を出たのは夜の21時頃だった。神崎は腕時計で時間を確認した。

その時、道の反対側に止めてあった黒色のベンツが目に入った。

運転席にはサングラスの男が座っている。サングラスの男は後部座席に向かって何か話している様だった。後部座席の窓はスモークブラウン色では見え無かった。

神崎が車の方を見るとベンツはゆっくりと発進して去っていった。

この商店街には似合わない車だな・・・

神崎はそう思ったが、さほど気にもせず駅に向かって歩き始めた。

「神崎さん！」

後ろから相川真理の声が聞こえた。

神崎は振り返った。

「駅まで送ってあげる」

「いいよ、すぐそこじゃないか」

「いいの、いいの、神崎さん今日はありがとう、また来てね」

「ああ、また寄せてもらうよ」

「久しぶりに見たわ、母の笑顔、すごく楽しそうだった」

「そうだね」

「本当はね、いつもあんなに明るくないの、今日は特別ね」

「そうなの？」

「そうよ、父が死んでからずっと元気無かったもの」

「そうか・・・」

「だから、また家に遊びに来てね、お願い！」

「そうだね、相川家には恩があるからね、また来るよ」

「ほんと！ほんと！約束よ！」

そう言つと相川真理は神崎の腕に手を回して小指を立てた。

神崎は相川真理の小指に自分の小指を重ねた。

「約束ね！」

楽しそうに鼻歌を歌いながら相川真理は神崎を駅まで見送った。

相川真理は神崎の腕を掴むと腕を組んだ。

無邪気に胸を押付けてくるので神崎はドキドキした。

香水の甘くいい香りがした。

「いい匂い」

神崎は思わず口に出した。

「うふふ、そうでしょう、母のお気に入りのお香水をちょっと拝借したの」

相川真理は神崎の顔を悪戯な視線でのぞき込んだ。

神崎の胸のドキドキが早くなった。

駅に着くと相川真理は手を振って神崎を送ってくれた。

「また来てね！ 神崎さん約束よ！」

「ああ！ 約束だ！」

神崎も小さく手を振って別れた。

## 第六章 製造工法

次の日、神崎が会社に出社すると田町が声をかけてきた。

「おはようございあっす」

「おはよう、田町」

「神崎さん、昨日は昼から早退なんてめずらしいじゃないっすか、何かあったスか？」

「. . . .」

田町は神崎の顔を覗き込んだ。

「ああ、ちよつと用事があつてね」

「用事っすか？ 何の？」

「んん. . . .」

鋭い. . . 女の勘か？

「田町、ちよつといいか、こつち来い」

「何っすか？」

「実は相川真理に会って来たんだ」

「えっ！」

「こら！大きな声だすなよ」

田町が大きな声を出したので解析技術課の連中がこつちを振り向いた。

「マジっすか！」

「だから大きな声出すなって」



神崎は田町の口を手で押さえた。

「神崎さんセクハラっス！」

「違う！ 違う！ 絶対違うし！」

神崎は周りを見渡すと解析技術課の連中に頭を下げた。

「何でも無いッス！」

田町の言葉を真似ると田町の口から手を離れた。

「後で話してやるよ」

「本当っスか！」

「ああ」

始業のチャイムが鳴って朝の連絡会議が始まった。

神崎は今日の業務をパソコンで確認すると中村課長の机に向かった。

中村がこちらを振り向いた。

「何だね」

「課長、時間ありますか？」

「ちょっと待ってくれ」

中村はパソコンでスケジュールを確認した。

「えーと、そうだな今日の午前中は会議で詰まってるな、昼からな

「空いてるよ」

「例のブラックウエハの件でちょっと報告があります」

「えっ、何か分かったのか」

「ええ、星野由美に会って来ました」

「何だって、どうやって調べたんだ」

「顔見知りの探偵に所在を探してもらいました」

「で、どうだったんだ」

「ええ、色々と事情がわかりました」

「分かった、じゃあ昼から人事部長と技術営業課長を呼んでおくよ」

「いえ、中村課長だけに聞いて頂きたいんです」

「えっ、どうして」

「事情を話すと長くなります、詳しいことは昼から報告させていただきます」

「よし！ 分かった！ 昼から話を聞かせてくれ」

「田町も同席させます、よろしいですか」

「いいだろう」

中村課長は以外に男気がある。理由も何も聞かずに昼からのスケジュールを入れてくれた。

午後13時、神崎は田町を連れてミーティングルームに入った。

「早速ですが星野由美について報告をさせて頂きます。星野由美、本名は相川真理、住所は桜川市南川1丁目、桜川情報高校の3年生です」

「何だって女子高生？」

「そうです女子高生です」

「女子高生が何故うちの会社の技術データーなんか盗んだんだ」

「それをこれからお話し致します」

神崎は昨日の状況を正直に中村に報告した。

「神崎の恩師の娘さんだと言うことは理解したが、彼女が技術データーを盗んだのは事実だ」

「技術データーを盗んだことについては彼女も十分に反省していますし私の前で両手をつけて謝りました。課長、今回のことは私に免じて彼女を恩赦してやって頂けないでし

ようか、お願いします」

そう言うと神崎は頭を下げた。

「神崎、頭を上げるよ、お前は何も悪いことしてないじゃないか」

「いえ、でも」

「分かった、この件は穩便に済ませよう、田町もどうだ、彼女を許してやるかい」

「神崎さんのお願いなら何だってOKっすよ」

「おまえ、神崎に惚れてるだろう」

「な、何言ってるんですか、課長、セクハラっすよ」

「ハハハ、いつでも仲人してやるぞ」

田町は真っ赤になった。

「神崎、今日は忙しいか」

「はっ？」

「たまには俺に付き合え」

中村課長はそう言うと右手でグラスを持つ仕草をした。

「はあ」

「出来たら、お前の友人の探偵も呼べよ、俺も会って見たいな」  
「彼は忙しいのか？」  
「いえ、たぶん大丈夫ですが」  
「そうか、それじゃ決まりだ」  
「社門の前に19時集合だ、田町もだぞ」  
「え、私もっすか」  
「何だ都合悪いのか？」  
「全然、OKッス」  
「じゃそっすいう事で」

中村は手を上げて部屋を出て行った。

「俺、課長のこと見直したよ田町」  
「そっすね、結構いい男っすね」  
「さて、本日の業務を急いで片付けるか」  
「そっすね」

神崎はクリーンルームに入ると急いでサンプルの評価を始めた。

「えーと、A社の接合評価からいくか」

神崎が解析作業を始めた時、後ろから声がした。

「神崎さん」  
「えっ・・・」

振り返ると生産技術課の吉田だった。

「なんだい、吉田君」  
「この前のブラックウエハなんですけど」

「ああ、再検データの件か、吉田君のおかげで助かったよ、どうもありがとう」

「神崎さん、これ見てください」

吉田は焼け焦げた部品を見せた。

「なんだいこれ？」

「これは評価装置のチャンバー（反応器）内の部品なんですけどね」「見事に焦げてるじゃないか、いや、溶けてるな」

「そうなんです、ブラックウエ八を入れる前にちゃんとチャンバー内の確認はしたんですが．．．今日、確認したら溶けてたんです何故でしょう？」

「何故でしょう？と言われてもね．．．」

「この部品は耐熱温度が1000もあるんですよ、こんな部品が溶けるなんて考えられません」

「1000？」

「材質は何なんだ」

「えーと、詳しくは知らないんですけど、絶縁物だと思います」

「耐熱1000の絶縁物が溶けた？チャンバーの内部を見せてくれるかい」

「ええ、いいですよ、チャンバー内は全然大丈夫でしたから、ああ、神崎さんちよつと待ってください。ウエ八観察用の紫外線LED照明が点いてますから消しますね」

吉田は紫外線LED照明のスイッチを切って通常照明に切り替えた。

神崎はチャンバー内を見渡したが、その部品の取付け箇所だけが激しく焼け焦げていた。

「チャンバー内はステンレス製だよな」

「そうです、テフロンも使用してありますけどね」

吉田は答えた。

もしかするとマイクロ波か？

神崎は相川教授が実験事故で無くなった理由が解った様な気がした。

ブラックウエハは紫外線が当たると自己発振してマイクロ波を生かせるんだ。きつとそうに違いない。そうか！ このウエハは常温で超伝導動作するんだ。しかも非接触

の光発電で電源供給するのか。すごいウエハだが駆動制御に失敗すると暴走する危険性があるんだ。まちがいないマイクロ波だ！

神崎は確信した。

「吉田君、その部品のスペアはあるのかい」

「ええ、1個だけ補修用にあるんですが原因がわからないので交換出来ないんです」

「交換しても大丈夫だよ正常に動くはずだから」

「そうですか？」

「ああ、俺が保障するよ、故障の原因は装置じゃなくてブラックウエハだ。部品の交換費用はうちの予算に落としてくれていいよ俺の責任だからね」

「そうですか、結構高いですよ」

「研究費の予算で処理するさ、気にしないでくれ」

神崎がそう言うと吉田は安心して部品の交換作業を始めた。

「さて、俺も自分の仕事を片付けるとするか」

神崎も解析作業を始めた。

午後19時、神崎はセキュリティカードをチェックして会社の門を出た。

会社の外に出ると金城の姿が見えた。

「今日は何だい神崎？ 会社の門で待ち合わせなんてめずらしいじゃないか」

「ああ、昨日の一件を会社で報告したら課長がお前に会ってみたいって言うからさ」

「それで誘ったのさ」

「へえ、物好きなオッサンだな、俺は男に興味はないけどな」

「まあ、そう言うな田町も来るからさ」

しばらくすると中村課長と田町が門から出て来た。

「すまん、すまん、待たせたか神崎？」

「いいえ、私も門を出たところです」

「あ、そちらが探偵さんかい」

「そうです彼が探偵の金城です」

「始めまして中村です、部下の神崎がいつもお世話になっております。昨日は神崎の調査を手伝ってくれたそうだね、礼を言うよ」

「いえ、いえ、とんでもない、でもまあちょっとは役に立ったかな？」

金城は神崎の肩をポンと叩いた。

「十分役に立ってるぞ」

神崎が答えた

「今日はおごらしてもらおうよ金城君」

「そうですね、それじゃお言葉に甘えまして遠慮なく行きますかね」

4人は駅前に向かって歩き出した。通勤路を抜けて一般道に出ようとした時、車が急発進した音が後ろから聞こえた。

みんなが後ろを振り返ると黒のベンツが凄いスピードでこちらに向かって来た。

「危ない避ける！」

金城が叫んだ。

車はそのまま4人をめがけて突っ込んできた。

金城は反射的に3人を道路の反対側へ押すと間一髪のところ自分身を避けた。

ベンツは急ブレーキをかけて10m程先に止まった。

金城が道路の反対側に目をやると神崎と田町が起き上がるのが見えた。しかし、中村が起き上がれない様子だった。

「中村さん大丈夫か！」



金城は中村のところへ駆け寄った。

「うっ．．．左腕をやられたようだ」

金城は急停車したベンツに向かって怒鳴りつけた。

「何しやがるんだこのやろっ！」

ベンツのドアがゆっくりと開いて中から4人の黒いスーツ姿の男が出てきた。

車の後部座席から最後に降りた男は金田だった。

「すまねえな、うちの運転手が新米なもんでね、悪い、悪い、中村君」

金田はニヤけた顔で中村に言った。

「おまえは．．．獵田．．．いや金田か」

「これは、これは、俺のことをよく知ってるじゃないか」

「何故、こんなことをするんだ」

「ブラックウエハの評価データを全部よこせ」

「何だと」

金田は神崎の方を見た。

「神崎、おまえの解析レポートは実に見事だ。元素分析から製造工法の推測まで出来るおまえの能力には目を見張るものがある。俺のところ雇ってやってもいいぞ、今の1

0倍以上の年収で契約してやる、どうだ」

「お断りだね、おまえの下でなんか死んでも働くものか」

「八八八、おまえも欲の無い男だな、それじゃ出世しないぜ」

金田はケラケラと笑った。

「冗談はこれ位でやめだ、全評価データを明日の朝7時まで持って来い、引渡し場所はここに書いてある。持って来なかったら、お前らと相川の命は保障しないぜ」

そう言つと金田はメモ用紙を神崎に投げつけた。

「なんて卑怯なやつだ」

「ふつ、卑怯だろうが何だろうが、この技術を一番に手に入れたものだけが巨万の富を得るんだ。このウエハの量産技術がどれだけの価値を持っているか、お前も分かってい

る筈だ神崎、それじゃ期待してるぜ」

金田がベンツに乗り込むと他の3人の男も車に乗り込んだ。ベンは再び急発進して去って行った。

神崎は中村を抱き抱えると何とか立たせた。

「課長大丈夫ですか」

「ああ、何とかな、左手の感覚がやっと戻ってきたよ」

「田町も大丈夫か」

「大丈夫っス、神崎さん」

田町も中村を支えた。

「神崎さん、救急診療所がすぐ近くにありますが」

「よし、そこへ行こう」

「俺に任せろ」

金城は中村を背負うと急いで診療所に向かった。

中村の診察が終わったのは21時頃だった。

担当の医師がレントゲン写真を持って神崎に診断結果を説明していた。診断結果は左手の骨折だった。

中村が救急治療室から包帯を巻いて出てきた。

「中村さん大丈夫か？」

「すまん、みんな、迷惑をかけて申し訳ない、軽症だったよ」

「何言ってるんですか重症ですよ、それに課長のせいじゃないですからね」

「そうですね、あいつらが悪いんっすよ、警察に連絡しましょうよ」

「ちよつと待つてくれ田町、慎重に行こう。神崎と田町は会社に戻つてブラックウエハのデータを光ディスクに焼いてくれ。データを渡さなかつたら相川真理の家族も危険だと思つんだ」

中村は怪我をしても冷静だった。

「神崎、データの引渡し場所はどこだ」

神崎はポケットからメモを取り出した。

「課長、場所は北上物流第4倉庫と書いてあります」

金城が神崎のメモを取り上げて住所を確認した。

「港区2丁目1-3・・・これは国営倉庫・・・しかもこの倉庫は

・・・」

「どうしたんだ金城？」

「この倉庫は自衛隊の倉庫なんだ・・・管轄は防衛省だ」

「何だつて、何でこんなところを引き渡し場所に選んだんだ、一般者は入れないじゃないか」

「そつだな訳が分からんな」

金城はそう言つと首をひねつた。

「とりあえず、神崎と田町はデータを取つて来てくれ、それから相川真理の家の電話番号は分かるか」

「ええ、分かります」

「電話してくれ、相川の家族も危険だ」

神崎は手帳を取りだして番号を確認すると携帯で電話をかけた。

「はい、相川です」

「もしもし、夜分恐れいります、神崎です」

「あつ、神崎さん！ 大変なの！ 真理が誘拐されたわ！」

電話に出たのは相川真理の母だった。

「何だつて！」

「さつき、金田から電話があつたの、警察に連絡したら真理の命は

保障しないって、神崎さんお願い！ 真理を助けて！ 神崎さんが明日7時にデータを持ってきたら返し

てやると言ってるの」

真理の母は泣きながら話した。

「畜生！ なんて卑怯なやつだ！ お母さん大丈夫です、必ず真理さんを助けます！ やつの欲しがっているデータを明日渡しますから安心してください！」

神崎は相川真理の母をなだめると携帯を切った。

「課長、大変です！」

「相川真理が金田に誘拐されました！」

「何！」

「くそ！ なんて卑怯なやつだムカつくぜ！」

金城は拳を握ると壁を叩いた。その時、神崎の携帯が鳴った。

「はい、神崎です」

「神崎さん助けて！」

「真理ちゃんか？ 今何処だ！」

「ハハハ、相川真理は俺が預かったぞ！」

「金田！ お前！」

「おい神崎、解析データは製造工法の見極めまでしっかりとまとめておけよ！」

「金田！ 彼女に手は出すなよ！」

「ああ、お前が完全な解析データを持ってきたら自由にさせてやるわ」

「約束だぞ！」

「ハハハ、いいだろう、約束してやろう、俺はこれでも義理堅い紳士だからな！ ああ、もうひとつ言い忘れていたぜ、サンプルも持つてこい」

「何だつて、サンプルはちゃんと返却したぞ」

「それがなあ、サンプルの返却先を真理お嬢様がちよいと細工しやがったんだ。なかなか頭のいいお嬢様だよ自分の自宅にサンプルを返却してやがった。それも持って来い、

わかつたな神崎、じゃあな」

そう言つと金田は相川真理の携帯を切った。

「田町！ 会社に戻るぞ！ 技術データをサーバーから全部引っ張り出してくれ」

「了解っす」

「すまないが金城は相川真理の自宅に行つてくれ。たぶんサンプルは相川真理の部屋にあると思うんだ、相川真理の母には俺から電話しておくよ」

「おお、まかせろ」

「それから中村課長、その体で申し訳ありませんが一緒に会社に戻つて下さい。技術データを外部記録媒体にコピーするには情報コーナーの許可と暗証コードが要ります」

「了解だ、よし、あと時間を決めておこう。タイムリミットは明朝7時だから車で会社を6時には出ないと間に合わない。やつは製造工法の見極めまで要求してるからな。こ

れをあと8時間程度でやり切るのは大仕事だぞ」

「金城、明日の朝6時に車で会社来てくれ」

「OKだ、任せろ神崎、俺のGTRなら30分で港まで行けるぜ」

金城と別れると3人は会社に戻った。

会社の保安所で中村課長は品質トラブルの緊急対応だと説明していた。

3人は事務所に入るとさっそく仕事にとりかかった。田町は技術サーバーにアクセスするとブラックウエハの技術データを取り出し始めた。

「中村課長！ 技術データの外部記録許可をお願いします！」

「OK！許可する！」

中村は田町から飛んだアクセス要求コードを許可すると暗証番号を入力した。データはネットワークを経由して光デスクに次々と転送コピーされた。

「かなりのデータ量っすね、神崎さん」

「そうだな、10テラバイトはあるだろう」

3人は光ディスク装置のアクセスランプを眺めた。

「神崎、ディスクのコピーに4時間はかかるぞ、サーバーに直接アクセスして技術解析を始めろ、それからPCを共有設定しろ、俺のCPU（演算制御装置）も使っていないぞ」

「了解です」

神崎は自分の机に戻るとサーバーへの直接アクセスを開始した。

神崎はデータをしながら次々と技術解析を行った。

中村は自分のPCモニターから神崎の解析作業を見ていた。

神崎は解析したデータを次々と技術レポート化していた。

「この原子配列は3次元構造になっている為、電子の移動は高速に行われる・・・さらに・・・」

神崎は少しつぶやきながら解析作業を順調に進めた。

中村は神崎の気迫に圧倒されていた。

凄い・・・神崎の頭の中はどんなってるんだ！ 普通の技術者ならこの解析に1週間はかかるぞ！・・・それを神崎は30分程度で処理している！

中村は腕の痛みを忘れてモニターを睨み続けた。それでも時間は刻々と過ぎていった。

「課長、ブラックウエハの技術評価データコピーが全部終了しました」

田町はそう言つと時計を眺めた。朝の3時を過ぎていた。

「よし、少し休憩しよう、神崎少し休め」

「私、コーヒー入れます」

田町は椅子から立ち上がると来客用のコーヒーを沸かした。



「はいどうぞ、神崎さんの砂糖いっぱいね」

神崎はコーヒを飲みながらPCの画面を睨んでいた。

「どう、神崎さん、行けそうっすか？」

「ああ、あと少しだ、あと少しなんだけど・・・」

「何っすか？」

「最後に発見したガドリニウムをどうやってこの配列に並べたのか想像がつかないんだ」

「お前のレポートを見ていて俺もそう思ったよ、神崎、これは即在に無い未知の製造工法だろう」

中村が神崎に言った。

「そうです、こんな原子配列は今まで見たことはありません。螺旋状に規則正しく原子1個1個を積み重ねてあります。しかも、一発形成ですね。これは現在の拡散工法では

不可能です」

拡散工法とは半導体の前工程製造工法のこと

「相川教授はどうやってこの配列を作ったんでしょうね、これが解ればこのレポートは完成します」

「神崎さん、これ、ネジみたいな形してますね」

田町がモニターを眺めて呟いた

「ネジ・・・？」

神崎の表情が一瞬変わった。

神崎はサーバーの技術ホルダーにアクセスするとシュミレーターソフトを立ち上げた。何かの公式を入れると、パラメーター（数値）をインプットした。

しばらくすると画面上に画像が表示された。表示された画像はネジの様な形をしていた。

「わかったぞ、これは磁界で作ったんだ、それも強力な指向性のある磁界だ、そうだ相川教授の得意分野は超指向性回転磁界だったんだ」

神崎はそう言うと、もう一度パラメーターを入れ直した。「画面にはブラックウエハと同じ原子構造配列パターンが表示された。

「やったー！ ブラックウエハの製造工法の秘密がわかったぞ！」  
「田町ありがとう！」

神崎は思わず田町を抱きしめた。

「神崎さん、だめですよ、課長が見てるっス」  
「んっ、何言ってるんだ？」  
「ハハハ、田町が照れてるぞ！」

課長が笑った。

神崎は再び凄い勢いでレポートを書き始めた。午前5時神崎の技術レポートは完成した。

「よし、田町、レポートを光ディスクに焼いてくれ、それと紙の印刷も頼む！」

「了解っス！」

田町は神崎の技術レポートをディスクに保存するとレポートの印刷を始めた。ディスクと紙の資料が出来上がったのは6時前だった。

神崎は携帯で急いで金城に連絡を入れた。

「金城、今何処だ」

「神崎、もう会社の前さ、いつでもOKだぜ！ サンプルも準備完了だ！」

「よし！ これからそっちに行くからな、会社の門の前に車を回してくれ！」

「了解！」

3人は会社の門を出ると金城の車に飛び乗った。

「いくぜ、シートベルトしとけよ！」

車は凄い加速で走り出した。

高速に入ると湾岸線を一気に駆け抜けた。

「金城、怪我人がいるんだからもうちょっと気を使えよ」

「中村さん、悪いな、もうちょっとだからがまんしてくれ」

「神崎、大丈夫だ、昨日から痛みなんてもう麻痺してるさ」

金城はエンジンを加速した。タコメーター（回転計）はレッドゾーンに入っている。時速は250kmを超えていた。

「凄いつスね、F1レースみたいっス！」

「由香里ちゃん、今日の俺はカッコいいだろう！」

「今日はカッコいいっスよ、筋肉！」

「うれしいね！ 由香里ちゃん！ もっとがんばっちゃおう！」

金城は前方の車を次々交わすと更にアクセルを踏んでエンジンを加速した。スピードメーターの針はもう役に立たなくなっていた。

「よし、インターを降りるぞ、もうすぐだ」

金城は車線を変更するとギヤを落して強力なエンジンブレーキをかけた。インターの料金所を過ぎると港が見えて来た。

「もうすぐ着くぜ、あれが北上物流第4倉庫だ」

金城は堤防沿いを走ると窓から倉庫を指差した。

しばらく走ると車は倉庫に到着した。

神崎は腕時計で時間を確認した。6時50分だった。

「何とか間に合ったな」

金城はそう言うとアクセルを1回吹かしてエンジンを切った。

4人は車から降りて倉庫に向かった。

## 第七章 マイクロ波

周りに守衛らしき人影は無く静かだった。倉庫の中央扉は閉まっているが右側に小さなドアがあった。

金城がそのドアを引くと静かに開いた。鍵はかかっていなかった。

「いやに静かだな」

金城はそうつぶやくと左手を少し上げて3人を手招きした。

4人が倉庫に入ると中はガランとしていて何も無く薄暗かった。倉庫の上の方の窓から薄っすらと光が差していた。

4人は周りを見ながら倉庫の中央に進んだ。

「やつら何処にいるんだ」

中村がそう言うと突然上から声がした。

「ここだよ中村君」

4人が上を向くと中2階にある事務所の扉が静かに開いた。事務所の中から金田と3人の男が出てきた。

金田は黒の背広姿だったが他の3人は迷彩色の軍服を着ていた。

「間に合った様だな」

「金田！ 約束通りブラックウエハの全解析データとサンプルを

持ってきたぞ！」

「ほっほう、さすがだね中村君、君の部下達は優秀だねえ」

「相川真理さんを帰せ」

「真理お嬢様はおまえらの目の前さ」

金田はそう言うと鉄の階段を他の男と一緒にゆっくりと降りて来た。階段の下まで降りると壁にあるブレーカーボックスの扉を開けてスイッチを入れた。

倉庫の天井照明がブーンとうなりをあげて静かに点灯し始めた。照明はだんだん明るくなり倉庫の中を照らした。

相川真理は倉庫の隅の椅子に縛られていた。彼女は眠っているようだった。

「真理ちゃん！ 大丈夫か！」

神崎が相川真理のもとへ駆け寄ろうとしたその瞬間、倉庫に銃声が響いた。

銃弾が神崎の足元をかすると火花が散った。

「おっと、フライングだよ神崎君」

神崎は驚いて一瞬立ち止まった。

銃声で相川真理が八つと目を覚ました。

「神崎さん！ 逃げて！ こいつら何をするか分からない連中よ！」

相川真理は椅子に縛られた体をバタバタさせた。

「おやおや、お嬢様はお目覚めかい。君達サラリーマンなんだから商品はちゃんと納品しないと困るねえ、サラリーマンの基本だよ、基本、神崎君」

そう言つと金田はケラケラと笑つた。

「データとサンプルをこちらによこせ！」

金田は首を少しひねると軍服の男に指示を出した。軍服の男は神崎から紙の資料と光ディスクを奪つと金田に手渡した。

「おい、サンプルもだ！」

別の男が田町からサンプルを奪つた。

「おい金田、約束は果たしたぞ、相川真理を返せ！」

「ああ、いいだろう、俺はこれでも義理堅いからな返してやるよ」

神崎は相川真理のもとへ駆け寄るとロープを解いて彼女を抱き寄せた。

「大丈夫か、真理ちゃん」

「うん」

相川真理は泣きそうになつて神崎に抱きついた。

「おまえらこんな事して後でどうなるか分かってんだろっな！」

金城が切れて叫んだ。

「おや？ サラリーマンじゃないのが一人いたな、忘れてたよ探偵さん、後でどうなるかって？ 簡単なことだよ、この倉庫に死体が転がってるだけさ」

「何だと」

「ハハハハ、もうお前らに用は無いらな」

金田はまたケラケラと笑った

その時、倉庫の上の窓から光が差し始めた。倉庫全体が明るくなり太陽の光が金田と軍服の男達を照らした。

軍服の男たちが銃を構えた。

「そのサンプルは偽物よ！」

相川真理がとっさに叫んだ。

「このサンプルが偽物だって？」

「そうよ本物のサンプルは別の場所に隠してあるわ！」

「もし、神崎さんの解析結果が間違っていたら？ どうなると思うの？」

「ハハハ、見苦しいぞ、相川真理、おまえから殺してやるつか？」

「殺しなさいよ、そうすればブラックウエハの製造工法は二度とわからないわよ」

「ふっ、気の強いお嬢だぜ、おい！ 念の為に確認しろ！」

金田は軍服の男に指示を出してサンプルケースの蓋を開けさせた。金田はウエハの端を両手で持つと表面を太陽の光に当てて確認した。



「なんだ本物じゃねーか！ ウエ八の拡散番号もスライス番号も合ってるぜ！この回路パターンにも見覚えがあるからな、間違い無く本物だ！」

「こら！ お譲！ うそつきやがったな！ お前から死んでもらうぞ！」

金田が切れて叫んだ。

その時だった、ブーンとウエ八から唸り音が聞こえた。

「何だ？」

金田が首をかしげた瞬間、軍服の男が持っている銃から火花が散り始めた。

「神崎さん！ みんな！ 床に伏せて！ お願い！」

相川真理が叫んだ。

神崎も金城も中村も田町も訳が分からなかったが相川真理が叫んだので床に伏せた。

「何だ？ 何だ？ 何だこれは？」

バーン！と音がして軍服の男が持っている銃が暴発した。

「うわー頭が痛い！ 助けてくれ！」

金田と軍服の男達は頭を押さえて苦しみ出した。

その時、金田が手に持っているブラックウエハが光出した。金田と軍服の男達は青白い炎に包まれている。

「みんな！ 目を閉じて！ 前を見ちゃだめ！」

相川真理がまた叫んだ。

次の瞬間、強力な発光と共にドーンと大きな爆発音がすると倉庫の天井が吹っ飛んだ。天井を支えていた鉄骨が次々に金田たちの上に落ちて来て、ギヤーと悲鳴があがった。

しばらくして天井の崩れる音が鳴り止むと辺りがシーンと静まり返った。

「大丈夫か由香里ちゃん？」

金城はゆっくりとおき上がると体に付いたほこりを払った。金城はとっさに田町と中村をかばって二人の上に覆いかぶさっていたのだ。

「私は大丈夫っス、課長！ 中村課長！」

「ふうー俺は生きてるか、田町」

「大丈夫っスよ、生きてるっス」

金城は神崎のもとへ駆け寄った。

「神崎大丈夫か？」

「ああ、何とかな！」

神崎も相川真理をかばつての上に覆いかぶさっていた。

「真理ちゃん立てるかい？」

「うん、大丈夫」

そう言つと神崎は相川真理を抱いて立たせた。

「おい、見るよ神崎、倉庫が半分吹っ飛んじまったぞ、いったい何が起こつたんだ」

金城は爆発した倉庫を見て呆然とした。

「ブラックウエハが動作してマイクロ波を発生させたんだ」

「何だつて？」

「真理ちゃんはブラックウエハの秘密を知っていたんだね」

「うん、でもあんなに凄いと思わなかつたわ」

「何を言つてんだよ、俺にはさっぱり理解できねえぞ！」

「ブラックウエハは紫外線が当たると光発電して動作するんだ、でも、その紫外線量が強すぎたから暴走して強力なマイクロ波を発生したんだ、強力な電子レンジみたいなも

のさ」

「そういうことか！」

「しかし、恐ろしいパワーだな、これじゃー軍事兵器にもなるじゃねーか！ そうか？ そういうことか！ 金田たちはその秘密を狙つてたのか！」

「ああ、真相はそうかも知れない。超高速コンピュータとしての使用じゃなく軍事兵器としての開発をしていたのかも知れないな」

「あ、神崎さん！ 何してるんですか？」

「えっ？ 何？」

「近寄り過ぎっス、離れて、離れて、セクハラっス！」  
「いやだもーん！」

相川真理が神崎に抱きついた。

「キヤー！ コラ！ お譲！ 離れなさい！」

田町が黄色い声を上げた。

「ふうー」

神崎はあきれてため息をつくと吹っ飛んだ倉庫の天井から見える  
青空を眺めた。

## 第八章 ルーキー

その日、ニュースではこの事件について湾岸の倉庫で謎の爆発事故と報道された。

事件はその後も調査されたが真相については結局わからなかった。

あの事件から数ヶ月が過ぎて4月になった。

会社に植えてある桜が見事に咲いていた。

その日の朝、神崎と田町は通勤路を一緒に歩いていた。

「神崎さん！桜が綺麗っすね！」

「ああ、そうだな」

神崎は会社の桜を見て相川真理の高校の桜並木を思い出した。

真理ちゃん元気にしてるかな？

神崎は心の中でつぶやいた。

「私も綺麗っすか？」

「ああ．．．ん．．．田町なに言ってるんだ？」

「つぶぶ」

田町はうれしそうに笑いながら神崎の隣を歩いた。

職場に入って朝会が始まると中村課長が恒例の社訓を唱えた。そ

の後に中村課長から業務連絡があった。

「今日は我が課に配属された新入社員を紹介します！」

そう言つと中村課長は居室のドアを開いた。

開いたドアからは一人の事務員が入ってきた。

「じゃ紹介しよう！ 相川君だ！」

「本日、解析技術課管理係に配属されました相川真理です！」

「よろしく願います！」

神崎と田町は顔を見合わせた。

「えー！」

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7690y/>

---

シークレットナイトライド 再編版

2011年11月22日23時52分発行